

常滑市民俗資料館

# 研 究 紀 要 X

2002

常滑市教育委員会

常滑市民俗資料館

研 究 紀 要 X

2002

常滑市教育委員会

## 発刊にあたって

常滑市民俗資料館が、開館してすでに20年の歳月が過ぎました。この間の常滑市の変化は、後世の歴史家によって特筆されるのではないだろうかと思います。常滑市域が、日本の窯業史に果たした役割は、決して小さなものではありません。そして、そのことを証明する作業は、まだまだ充分とは言えない段階にあります。

中世の古窯調査は、すでに半世紀近い蓄積があり、その研究から様々なことがらが明らかになってきています。全体の大枠に付いては、その研究によってすでに解明され、より具体的な問題が研究の課題となってきていると考えます。

常滑市域では、窯業関連の文化遺産を除くと、古くまでさかのぼることのできる資料は、ごく限られたものになります。その中で神社棟札に記された情報は、断片的ながら村落の成り立ちをうかがい知ることのできるものです。多賀神社の棟札調査によって、この神社は藤原三所権現として成立し、その後、富士浅間神社、多賀神社、山神社が合祀され、やがて多賀神社のみが前面に現れてきたという経緯を知ることができました。そして、その由来には、常滑市南部にかつて広がっていた枳豆志荘という荘園とも関わる要素がうかがえます。なお、今後の研究がまたれるところです。

近代の芸術分野は、当館の対象とする領域からは、多少ずれるものではありますが、彫刻に関しては、輸出用陶器の生産や縁起物の生産において重要な役割を果たしてきました。そして、それは常滑窯業史の近代化の一面を物語るものです。その変革期の様子や人物像が、描写された寺内信一氏の記録は、これからもなお吟味されるべき資料であろうと思われれます。

激しく移り変わる時代においては、後世に残し伝えていくべき資料を可能な限り保存することが求められます。そして、その資料から導かれ、あらたな姿で立ち現れるこの地域の豊かな歴史像を少しでも多くの市民のかたがたと共有していきたいと切に願うところであります。

常滑市教育委員会  
教育長 佐藤利光

---

目 次

---

大曾古窯跡群の研究 .....	3
多賀神社棟礼調査について .....	24
多賀神社棟礼随想 .....	44

# 大曾古窯跡群の研究

常滑市民俗資料館

中野晴久

はじめに

大曾古窯跡群は、平成11年に発掘調査が実施され、平成13年の3月に報告書が刊行された中世古窯群である。すでに報告書において、この遺跡の歴史的な位置付けを行っており、新たに論じるには、それなりの新たな分析が加えられ、それに伴ってあらたな成果が示されるべきであろう。しかし、本稿は残念ながら、そうした研究成果を提示する以前の段階に留まっている。

報告書の作成にあたっては、遺漏のないようにつとめてはいたが、最終段階で様々な作業をまとめる過程で、特殊な出土品として選別してあったコンテナを別の場所に置いたことを忘れたまま報告書を仕上げってしまった。そして、刊行後に資料を片付ける段になって、その特殊資料のコンテナが現れたのであった。

したがって、本稿は報告書に記載漏れとなった資料の追加報告を主たる目的にし、それらが特殊資料として区別されるに至った背景を論じることで、失態の弁明としたいのである。

## 1 土師器鍋 (1-1)

器形を復元するには至らない破片資料であるが、口縁部を含む資料で、その編年的位置を求めることができる資料である。器表は黄白色を基調とするが、内面に暗灰色の部分があり、器胎内にも灰黒色を呈する部分が認められる。外面に暗灰色は及んでおらず、外面には使用時の被熱による変色と思われるこげ茶色の部分がある。

口縁部から肩部にいたる部位の資料で、肩部はかすかに彎曲しながら内傾し、口頸部はラッパ状に外反して造られる。口縁部の先端を内側に折り返して玉縁状に肥厚させる特徴を持つ。器表外面は凹凸が顕著で、器表にはナデの痕跡が部分的には認められるが、規則的な調整は施されていないようである。これに対して口縁部内外は横ナデ調整が丁寧に施されており、肩部内面にはハケメ状

の調整痕を観察することができる。

肩部の外面の凹凸が認められるのに対して、その内面はきわめて平滑に仕上げられており、その器壁は薄いところで0.3cmほどでしかないことから見ると、内面をハケで削るように仕上げる過程で、そのハケの当る反対側（外面）を押えたために凹凸が生じたものかとも推測される。

胎土には砂粒が多く含まれ、その砂粒は角張った形状をなす。微小な雲母も含まれているが肉眼では、ほとんど気付かないほどに小さい。

器形、器壁の厚み、調整技法、そして焼成の状態や胎土が示す特徴など、そのいずれをとっても、この製品はこの遺跡で生産されたものではない。そして、器表に使用痕跡があるところからも明らかのように、この場で使用されたものと理解される。この器形の土師器は、これまでの古窯跡調査でも、しばしば検出されているものである。

工人が窯の焼成にどれだけの日数を要したのかについては、具体的な推計がきわめて難しい。それは、温度の管理をどのように行うかという問題にも繋がり、今日のように温度計を設置できない状態では、慎重にあぶり焚きを行った可能性が高いし、温度上昇のカーブを緩くした可能性が高いであろう。炙りが短く、温度上昇が急なカーブを描けば、それだけ失敗する確率が高くなるのである。また最高温に達してから、どれだけの時間その温度を継続したのかという問題も残されている。こうした問題は、実験考古学によっても、簡単には解消しない。しかし、実験考古学の知見からすれば1週間ほどで焼成に十分な温度は得られることが判明している。

そして、この期間は昼夜の別なく燃料を投入する必要があり、焼成期間中に食事のための炊事が行われたことは容易に推測できる。この資料は、1号窯の前庭部末端から灰原部において検出されており、使用後に廃棄された可能性がうかがえるものである。

従来、この種の土師質鍋については、伊勢南部からもたらされたものであるとする理解を行ってきた。南伊勢における研究によっても、この種の土鍋は大量に検出されており、一定の地域性を発揮していることから南伊勢型土師質鍋という呼称も与えられている。

ただし、この資料は伊勢南部における特徴が発現する前段階のものであり、

その意味で南伊勢と特定することには、多少問題を含んではいる。しかし、南伊勢の特徴が顕著になる13世紀段階の鍋も、古窯跡の調査でしばしば検出されることを考慮すると、この段階で伊勢南部地方との深い結びつきがあったと想定した方が自然ではないかと考えたい。

そして、この土師質鍋が中世窯に伴って高い確率で検出される背景には、半島と伊勢南部との頻繁な交通が存在したという事が考えられる。すでに、中世窯において土師質の鍋釜類を生産しているにもかかわらず、あえて別の産地から同種の機能をもつ器を運び込み、それを使用するという現象は、自らの生産品よりも外部の製品を日常的に用いていたということを物語るのではなかろうか。

伊勢地方は、山茶碗を食器として日常的に用いる文化圏の内にある。そして、伊勢において山茶碗生産は、行われていないことから当然山茶碗は外部から供給されることになる。その山茶碗は知多と渥美の中世窯で焼かれた製品が中心に用いられ、14世紀になると知多・渥美の山茶碗生産は終焉を迎え瀬戸と東濃の山茶碗が、それに代わるという大きな流れが確認される。

知多と渥美が混在する伊勢南部地方は、当然海上交通を介して生産地と消費地が結びついていると考えるべきである。その証左となるのは、渥美の山茶碗の分布が尾張から北部伊勢にかけて、ほとんど認められないという現実がある。知多の山茶碗に関しては、その分布から海上交通のみを主張することは考え難いが、山茶碗の分布が伊勢にとどまらず、熊野灘沿岸部から紀伊半島南部に至るまで点々と確認されつつある現状を考えると、海上交通を否定することは不可能に近いと思われる。

山茶碗は、1回の焼成で数千という数が生産できるもので、その成形や仕上げ、装飾といった手間が省略された製品である。したがって、個々の商品価値は低いものとみなすことができる。その山茶碗が伊勢に濃密に分布しているということは、頻繁な交通が行われており、その流通にかかるコストは、きわめて低かったということになるであろう。これと表裏をなすのが、土師質鍋の存在である。非常にうすく作られた鍋は、その耐用年数の短いものと考えられる。窯跡でしばしば検出されるのも、その鍋の破損率が高くて窯焚き作業期間の炊事で、しばしば使用不能になったために現れた現象と理解すべきであろう。つ

まり、そうした低コストで消耗品的な産物が流通する背景に頻繁な交通があったと想定できるのである。

この土師質鍋の出土個体は、その破片資料の数や、細部の形態、色調、胎土の一致などから見て1個体分になると推定できる。

## 2 羽釜（1-2~5）

丸底で口縁部下に水平に突出する鐔を付けた煮炊具を羽釜と呼んでいる。これまでの調査においても、しばしば検出されてきた器種であるが、その出土例を見ると圧倒的に12世紀後半に操業した窯に多い。本窯の事例も、やはりこの時期に属するもので、その出土位置からは1号窯の製品であったと考えられる。

数個体分の破片が出土しており、一例は硬く焼き締まっており茶褐色をしているが、その他はいずれも焼成温度が低く、灰白色から黄褐色といった色調を呈している。いわゆる生焼け状態である。これまでの出土事例を見ても、羽釜の焼成状態は多くが生焼け状を呈しており、壺や甕に認められるような自然釉の厚くかかった個体は皆無に近いというべきである。

羽釜と同様の機能を果たす鍋も、個体数は少ないながら過去の調査では検出されている。大曾古窯跡では鍋の出土はなかったが、時期的に近い事例としては松測古窯址群での出土が知られている。この鍋においても、焼成状態は硬質ではなく、比較的低温で焼成されたものが多く出土しているのである。

胎土は砂粒を多く含んだ土が用いられており、これは生焼けの灰白色系の資料では、さほど顕著に認められないが、やや褐色を帯びた資料では、砂粒が白色の粒子として明瞭に識別できるため、目立った特徴となっている。

煮炊具は火にかけて使用するものであり、底部を中心に高温が繰り返し加えられる。つまり局部的に加熱され膨張することから、その部分的な膨張を器が吸収するためには、構造が柔軟になっていることが必要になるのである。全体に焼成温度が低いという傾向は、そのための対策がとられた結果と推測できる。また、胎土に認められる特徴も緻密な粘土粒子のみで作った場合、局部の加熱膨張による個体の歪みを吸収できなくなるという不具合を解消するための選択

といえよう。近世以降においてすら焙烙のような加熱具は土器質の素材で作られていた。

窯跡出土の事例から認められる羽釜や鍋の特徴は、生産地における第1次選別の段階で破棄されたものの特徴である。この段階で認められる特徴から推測できるのは、これらの器種が、窯の内部でも温度の高くならない部分に置かれていた可能性が高いということであろう。そして、焼成温度が低すぎて製品にならないと判断された結果、灰原部に廃棄されたということである。ときどき認められる薄く自然釉が付着した製品などは、焼成中に亀裂が生じたために廃棄されたものと考えられる。

検出された羽釜の細部の違いから分けると、少なくとも4個体分は明かにある。そして、その内で口径の復元できたのは2例であるが、その口径は34.0・25.4 cmになり、鏝の径は43.0・36.8 cm、口縁部高4.3・6.7 cmになる。器高はどちらも25 cmほどになると推定される。後者(1-2)の復元数値は、かなり無理をして出しており、口縁部高以外は信頼度の低いデータである。

知多の中世窯で生産された煮炊具が、消費地遺跡からまとまって出土しているのは、尾張平野部の遺跡であり、愛知県西春日井郡清須町の土田遺跡などが好例となる。これまでに筆者が見た消費地遺跡出土の羽釜は、さほど多くの個体ではないが、灰白色よりは褐色系の色調のものが多く、焼き締まりの程度は低いものであるという印象が強い。

羽釜の焼成は、東海地方の古代・中世窯において広く認められる現象である。近年、瀬戸地域の後期灰釉陶器窯における羽釜焼成事例が複数認められ、猿投(東山)窯においても少数ながら12世紀前半の事例が確認されている。ただし、これらの事例はいまだ例外的なものであり、12世紀後半に属する知多半島の中世窯での生産は、それらに比べて非常に多くの窯で行われているのである。そして、13世紀ころになると、その生産例は急速に減少している。そして、この現象は消費地遺跡においても認められ、知多の中世窯の製品は13世紀末から14世紀にかけて姿を消し、土師質鍋釜に転換しているのである。

生産者の側から見ると、窯という焼成施設の特性を工人が熟知していて、どうしても高温が得られない場所には、煮炊具を窯詰したということが考えられる。そして、その傾向は、灰釉陶器生産の後半(10世紀後期～11世紀初頭)に

は、すでに現れていたとみることができる。もっとも、その後にこの煮炊具生産が継続して、やがて知多で盛んになるかという、その継続性については、いまだ明確にはなっていない。12世紀後半に知多でその事例が急に増加する現象は、甕などの大型陶器生産のあり方と類似している。

また、自ら煮炊具を生産できるにも関わらず、先に見た土師質鍋のように他産地の鍋を工人達が用いていた可能性が高いということである。これまでのところ知多の中世窯で生産された羽釜は、尾張平野部に集中的に供給されており、遠隔地まで運ばれた事例はない。したがって、この製品については、近隣の需要に合わせて生産された可能性が高いものの、その使用法については、土師器鍋との比較などでなお検討が求められるものとなろう。

なお、13世紀に入ると、その生産が減少することの背景としては、窯の床面傾斜が13世紀中ごろから急速に緩やかになり、窯の奥部まで甕が窯詰されるということが行われるようになった点を指摘しておきたい。知多郡阿久比町の小白根古窯址群A地点1号窯の事例は、これまでに見られない特異なものであるが、煙道部ぎりぎりまで甕を窯詰したことを証明している。こうしたことが可能になったのは、窯の床面傾斜が緩くなったことを第1の要因とすると考えられるが、その変化を生み出すには効率的な焼成技術あるいは燃料の変化に伴い奥部まで均質に温度が上がるといった要因があったのではないかと推測する。

13世紀に入ると南伊勢型土師質鍋の生産は本格化する。そして、尾張平野部においてもその出土事例は増加している。ただし、羽釜形の土師器が一般化するのには、この地方ではより新しく14世紀以後のことのようである。

中世窯で焼かれる羽釜や鍋は、いずれも肉厚に出来ており、仮設的な炉ではなく作りつけられた竈での使用に向けて作られたものとも考えられる。それに対し、南伊勢系の鍋や羽釜はきわめて薄く作られており、簡易な施設においても容易に使用できそうである。そうになると、もう一つの鉄製鍋や釜との関係が問題となろう。中世窯で生産される鍋が南伊勢系の鍋とは異質な形態をとり、鉄製鍋の模倣を想起させるものであることも、その関連を重視するべき要素と考える。

### 3 陶錘 (1-6)

黄白色を呈し、軟質の焼成状態である。形状は管形で両端は平坦に仕上げられている。外面には、ヘラナデによって整形した痕跡が認められ、孔内面には成形痕と思われる痕跡がかすかに残る。棒に粘土紐を巻き付けて成形したものと推測されるが、整形も施されており明確ではない。

長さ11.8cm、最大径4.1cm（推定4.5cm）、紐通孔の径2.1cmという大きさと、現重量は120gである。全体のほぼ半分ほどしか残存していないため、本来はその倍の重量があったと推定できる。陶錘としては、きわめて大型の部類に属している。やはり出土位置から推して1号窯の製品と考えられる。これまでの陶錘出土例としては、もっとも古い時期の所産とすることができる。本例より多少古くさかのぼる可能性のある資料としては、知多郡東浦町の八巻古窯址群の報告例がある。この例も陶錘としては大型の部類に属している。

陶錘の生産は、中世以前の窯ではほとんど例がないと思われるが、12世紀に入るとしばしば窯跡から検出されるようになる。鎗場御林B-3号窯の窯内で検出された状態は、藁紐に20個の陶錘が通され、焼成室中ほどの壁際床面に置かれていた。その位置からは焰のまわりのさほど良くない場所に置かれたと考える事もできる。この事例は13世紀後半のものであるが、12世紀代のこの製品の出土例は、多くが単品での出土で多数が連なって検出される例は見られない。

愛知県一宮市の大毛沖遺跡出土土錘を分析した久保禎子氏の研究を参照すると、大曾古窯出土の陶錘は紐通し孔の径や、その重量からみて大型魚をも対象にした規模の大きな地挽き網（大網）の錘である可能性が高い。こうした漁労具が、遠隔地に供給されたとは考えがたく、近隣の漁民との関連で需要があったと推測される。

知多市八幡の下内橋遺跡では、中世期に位置付けられる土錘がまとめて検出されているが、本例に匹敵するような大型の陶錘は認められない。なお、大曾古窯の陶錘は焼成中に胎土中の空気か水分が原因で破裂したような剥離痕跡をのこしているが、こうした破損がなくて、この焼成状態で消費地から出土し

た場合、陶器の窯の製品とは認められないほど土器に近い状態である。

#### 4 小型片口鉢 (1-7・8、2-1)

灰原2区の出土で、ほぼ全体が残る個体(1-7)である。片口鉢というより、山茶碗を大型化させたようなプロポーションで口部の一角を外側に押し出し注ぎ口を付けている。口径は18.0cm、器高6.1cm (推定7.0cm)、底径9.8cmになり、外面低部の周辺には高台の剥離した痕跡が認められる。ただし、その剥離面が被熱して変色しており、焼成前の段階か焼成中でも早い段階で高台が脱落したことは明らかである。

その大きさは、山茶碗にはない規格であり、高台を付けた底部周辺と体部の基部には、回転ヘラ削りによる調整が施されており、底部のヘラ削りが及んでいない部分には山茶碗に見られる回転糸切り痕がなく、灰が釉化して付着した痕跡が認められる。これらの諸特徴は、いずれも片口鉢に共通して認められるものである。これらのことから、これを片口山茶碗とすることは困難である。しかし、その一方で、すでに報告したこの窯の片口鉢の中には、小型の類が存在するのである。その器形を見ると体部の内彎が弱く、大型の片口鉢を小型化したというに相応しいプロポーションである。ここで取上げている小型片口鉢は、口径・器高がさらに小さくなっており、底径はほぼ等しい値を示している。

片口鉢のバリエーションとして、大きくⅠ類とⅡ類が存在し、基盤とする技法が異なる事は広く認められているところであるが、生産地においては、それぞれの類の中にも定型から逸脱したものが希に認められるのである。本例もその中に含まれるような部類であるが、その成形は丁寧で戯れに作ったというようなものではない。

これまでの事例では、常滑市の四池古窯址群1区の出土品中に類似する資料があり、そこでは下胴部の欠損した資料しか検出されなかったことから片口山茶碗として報告したが、上半部のみであれば大曾1号窯のものも片口山茶碗とするであろうものであり、両者は近似している。大曾例では重ね焼きの痕跡は認められないが、四池例ではその痕跡があった。このふたつの事例から、小型片口鉢の中に山茶碗に近いプロポーションをとる一群を抽出することは、可能

かと思われるが、現時点ではなお慎重を期してその可能性の指摘にとどめる事にしたい。

報告書に小型の片口鉢として示した資料と、その規格がほぼ一致し、細部に多少違いが認められる資料として2-1を示した。口径27.4cmで器高は11cmほどになると推定できるが高台の高さが欠損のため不明である。内面に自然釉が厚く掛かっており、最上部に重ねられて窯詰された可能性が高い。

体部の内彎が強く、口縁端部の角ばった形が他の片口鉢と比べると異色ではあるが、この程度の多様性が含まれていた器種として理解したい。

片口鉢として一括りにできないと思われるのが1-8に示した資料である。口縁部を屈曲させている点に特徴がある。口径など、小片過ぎて復元できないが、松測第21号窯に類例があり、その資料では口径が30.0cmに復元されている。口縁部周辺はロクロによる丁寧な整形が施されており、全体に薄くなっている。その器壁の厚みと口縁部の屈曲の度合いが、本例と松測21号例では異なっている。本例は小片であり、注口が付くかどうかは判然とはしないものである。したがって、その器種の設定についても不確定な要素が多いが、器形としては鉢に入れるのが妥当であろう。

## 5 押印文をもった広口壺 (2-2)

広口壺の中に押印文を伴う例がまれに認められる。それは、甕類の出現期に近い時期に認められるものと、13世紀も後半に入って、一旦は押印文を施す手法が消えてから、別の意味付けをもって復活したものとに大別されうる。前者は規則性をもたずに押印文が施され、その後にヘラで部分的に押印文をナデ消すことを行っている。後者は主として半島の北部の窯で多く認められるものであるが、壺の肩部に押印文を一つないし二つ程度施して印花文のように装飾としたものである。

広口壺に押印文を施すという例は、一般的なものではなく、印花文的な装飾としての押印文をもつ個体は少なくないといいつつも、なおその数は少ないといわなければならない。しかし、押印文は甕器種において一般的に認められるものであり、はじめランダムに押印され部分的にヘラでナデ消されていたもの

が、やがて極めて装飾性の強い文様に変質していくのである。しかし、甕においては、その間に下胴部から肩部にかけて数条の押印文を帯状に施す段階がある。これまで、この段階で広口壺から押印文は消えて甕とは独立した器種になると理解してきた。

大曾古窯の報告書においても、下胴部資料ながら押印文を伴う個体を一例報告したのであったが、その上部の資料が漏れていた。今回追加として報告する個体は口縁部から胴部にかけての資料で押印文は肩部に一条と下胴部に一条の計二条がめぐっている。つまり報告書で示した事例は、この下部の押印文帯が部分的に残った資料であったことになる。しかし、押印の文様意匠が異なっており、個体は別ということになろう。そして、この大曾例は、中世常滑焼編年においては、2型式期の特徴を備えるものである。この時期に確実に押印文を伴う広口壺が存在するという事は、なおこの器種が甕と強い関係にあったことを示している。

口径21.4cm、口頸部高3.1cm、最大径34.2cmで器高は下胴部が欠損しているため正確な復元は難しいが、およそ40cm程度になると推測される。この数値を見ると口径と最大径は、この時期の通常の広口壺に認められる値である。口頸部高は、やや低いが、それは口縁部が外反して下方に垂れた結果と考えられる。そして、その器高が高い点に注目するべきであろう。通常、広口壺の器高は最大径とほぼ同じ数値になるのであるが、この資料ではかなり長胴のプロポーションをとることになる。そして、その器形であることと広口壺でありながら押印文を伴うこととの間に関係があるのではないかと思われる。

これまでの出土例からみると、常滑市の長曾古窯址から体部資料ながら、一例押印文を二段、帯状に施文した広口壺が確認されている。その年代は口縁部を欠いているため特定しづらいものの、12世紀終末から13世紀の前半までの年代には納まるものであった。型式としては3型式から4型式に相当する。この資料のみで、しかも12世紀後半の資料が抜けていた段階では、極めて特殊な事例として扱うより方法がなかったが、大曾例の存在は、その間をつなぐものとなるのである。

広口壺については、甕と深い関連性があることについて、それを否定するものではない。そして、これを小型の甕としないのは、このサイズにあっては押

印文の省略が急速に進み、しばしば三ないし四耳の装飾が伴うことにある。ところが、細々とはあるが押印文が、このサイズにも残存することが判明してきた。なおかつ、甕とするサイズにも耳の付く事例が岩手県の平泉遺跡群で検出されている。

中国産の褐釉四耳壺の中には口径が大きく、胴径とほとんど差がないほど寸胴なものがある。そうしてみると、中世の知多半島で生産された甕は、かつて赤羽一郎氏が提唱したように大壺として器種設定すべきなのかもしれない。しかし、その一方で越前窯の製品で嘉元四年の紀年銘をもつ広口壺サイズの肩部には、年号に続けて「とらが大夫のか免」と記されているのである。「か免」は「かめ」である。つまり、14世紀初頭の越前地方において、この種の器を「かめ」と見なしていたということである。

考古学の用語が、歴史的呼称と一致する必要はないのであり、学術用語として「かめ」を「つぼ」と呼ぶ事は許されるはずである。問題は、その容量や装飾の現れ方が量的に異なるという器の大型を「かめ」といい小型を「つぼ」と呼ぶ事が認められるかということになる。これは、中世陶器に限らず、古代須恵器などにおいても問題となる点であり、その結論は、残念ながら早計には出し得ない。

## 6 押印文を持つ小型壺（写真・小壺、拓本小壺）

小片が1点あるのみである。外面には薄く自然釉がかかり硬質に焼き締まっている。内面には輪積み成形痕が明瞭に残っており、この部分が壺類の肩部に相当することを示している。全体の彎曲の度合いからみても、かなり小型の壺で長頸壺や細頸瓶、片口小瓶などが推定可能である。

この種の小型製品に押印文がつくのは13世紀の後半段階の鷹口壺（片口小瓶）に事例があるものの、きわめて稀である。その特異性は、あるいはこの窯の操業に関与した工人の特性とも考えられる。それは、前項に取上げた広口壺に施された押印文とも関連するものであろう。

## 7 窺描き記号文（記号文1・2）

大曾古窯跡群の報告書において、すでに片口小瓶1例と甕2例の記号文を報告したが、未報告資料として、その他に甕2例と広口壺1例の資料がある。文様意匠としては甕の1例が+文であり、広口壺は横長の楕円状の意匠になる。今一つの甕の記号文も単純な線であり、複雑な意匠が構成されていたものではない。線の彎曲も弱いことから推測すれば×意匠になるのではなかろうか。

この遺跡から出土した記号文は、これで6例になるのだが、その内5例までが+文の系統の意匠で、一例のみ○文意匠ということになる。これまでの知見では12世紀代の記号文の意匠は、圧倒的に+文系意匠が多い。ただし、記号文をもつ資料そのものの出土例は、多くはないのがこの段階である。そして、13世紀も中ごろから記号文は甕に盛んに施されるようになるのであるが、その段階から○文系意匠は+文系意匠に匹敵するほど一般的な意匠となっている。したがって、この広口壺の○文系意匠は、ほとんど類例のない12世紀段階の○文系意匠の事例とすることができるのである。

この遺跡では、窺描き記号文がきわめて細い線で刻まれていたり、体部の内面に刻まれていたりしており、その記号文のスタイルがまだ確立していないのではないかと思わせるほど多様である。

## 8 押印文（拓本140～180、追加1、2）

大曾公園古窯跡群出土の押印文は、すべて1号窯のものと考えられる。報告書では22種類の押印文を報告したが、その後2種類の未報告文様が確認された。したがって24種類の文様原体が用いられていたということになる。この類別は、(139・140・141)と(142・143・144)のように同じ縦線文のモチーフながら、その線の粗密が異なるという違いや、179と180のように同じ原体と考えられるが、円弧が入れ子状に重なった文様に縦線があるかないかだけの違いで類別されていたりする。つまり、あくまでも原体の違いによって行われたものである。しかし、実際の類別作業を行っているとき縦線文でも中間くらいの線によって構成されているように見うけられるものがある。これを類別する作業は、かなり

困難であったため、このレポートにおいてもなしえていないのが実情である。同じ事情が格子目文においても言えるのである。したがって、より微細に類別を行った場合、原体の種類はさらに増える可能性があるのである。しかし、その増加はあっても数個の原体ということになるだろう。

文様の原体が24種程度というのは、窯1基のみの事例としては、非常に多い数といえる。そして、この窯では複数原体を一個体に施す事例（163・164・165・166）が認められる。こうした事例は12世紀代に稀に認められるが、押印文の1原体が1工人に帰属するものではないことを証しているといえよう。そして、1工人が2原体を用いた可能性を示唆している。また厳密な分析は行っていないが、179と180の相違は、一見しただけでは区別がつかないほど小さい。これは（171・173）と172の相違においても言えることであろう。

こうした押印文のあり方を見ると、この文様は造り手の識別記号として施された物ではないということを示しているということになるだろう。そして、この豊富な意匠が、類似しつつも谷を挟んで隣接する柴山古窯址群などとの間で共有されていないことも注目される現象である。つまり、この押印文は、かなり狭い範囲で生産地を特定しうる指標になるのである。ただし、意匠の類似ではなく、一致ということになると消費地遺跡出土資料と生産地を結ぶことができる事例が、極端に少なくなるのである。そして、縦線文や格子文などの基本的意匠は、半島全域に広がっている。しかし、その一方で171・172・173や176・177・178のような文様は半島中央部の2型式段階の窯で、しばしば認められる意匠である。因みに、青森県東津軽郡蓬田町の蓬田大館遺跡出土の甕は、171～173の意匠と基本的に共通するものである。この資料は、その胎土などを観察すると、渥美窯製品である可能性が高いと判断されるのだが、押印文に関しては知多半島中央部との関連が指摘できる資料である。そして、174・175や179・180のような細密な意匠は、この窯にほぼ特定できるほど分布範囲の狭い文様になると考える。残念ながら、この意匠をもつ消費地遺跡出土品は管見に触れていない。

この遺跡では、甕が大量に検出されているが、それを押印文で区分すると、縦線文が最も多く（667.5kg）、線の粗密でおおきく2分類できる。今、手元に分類された体部に押印文をもつ資料の重量を測ると次のようになる。140文様は137.9kg、143文様は529.6kg、146文様は6.2kg、147文様は96.0kg、149文様は52.8kg、151文様は19.8kg、153文様は17.6kg、154文様は44.8kg、155文様は

20.6kg、158・159文様は27.4kg、161文様は27.2kg、167文様は22.4kg、168文様は39.4kg、170文様は3.4kg、171・172文様は59.2kg、174文様は1.0kg、176文様は0.4kg、178文様は2.2kg、179・180文様は29.2kg、追加1文様は3.0kg、追加2文様は12.4kgであった。通常、この時期の甕は大型で30kg弱である。なお、この数値には、口縁部や低部に押印文を持つ資料は含まれていない。

次いで多いのは粗い縦線文に一本の横線文を入れて中央で二分した縦長格子目文の意匠である（59.2kg）（96.0kg）。横長長方形に対角線を入れ、四つの三角形を入れ子の山文で満たした意匠も多く、これは3原体あったことが識別できる。

## 9 まとめ

大曾古窯では2基の窯が検出され、その窯のうち2号窯は小型の窯で山茶碗類の専焼に近いと考えられる。それに対して、1号窯は豊富な器種を生産しており、甕壺類に今回追加報告したような羽釜や陶錘などまで生産していたのであった。

時期的には2号窯が先行しているものの、この2基の窯の時間差は少ないのである。こうしたわずかな時間差の間に生産内容が大きく変化することの背景は判然としてはいない。しかも、この2基の窯の構造には大きな違いがないと見る事ができるのである。

こうした12世紀後半段階の大きな変化は、半島の中央部において顕著に起きているのである。そして、その段階で知多半島の甕壺類が、全国規模の流通を果たすことになる。

山茶碗は、東海地方に濃密に分布するものの、その範囲を越えるときわめて稀な存在になる。この東海地方という範囲には、近江東部から熊野にいたるエリアも含まれると見る事が許されるのではないだろうか。そして、この流通域にもたらされる製品が、山茶碗・小皿と今回報告した中の羽釜や陶錘といった特殊な製品である。

窯跡出土資料は、窯出しの段階で、窯の中に放置されたものと、窯から出されて、窯場で選別され、製品としての価値を持ち得ないと判断されたことにより、廃棄されたものと考えられる。この判断を行ったのは、生産者とみるべき

であろう。しかし、流通に関わる人物が関与している可能性を完全に排除することはできない。

窯場から居住地に運ばれたことを示すかと考えられる事例が、武豊町のウスガイト遺跡における未使用山茶碗の溝内への一括廃棄である。これを二次的な選別が行われた結果と見れば、半島から出る段階では、ほぼ品質に差はあっても完全なものが出荷されたと考えられる。ところが、安濃津遺跡の調査において、およそ製品として使用に耐えない山茶碗が大量に廃棄されていたという事実が判明した。安濃津は、明かに伊勢湾を渡って半島からもたらされた山茶碗の集積地ということになる。そして、ここでは、なお選別作業が行われているのである。

ここで誰が運んだのかという問題が出てくる。海を渡って、そこで廃棄される可能性のあるものを運ぶのは、いったいどういう人物なのかということである。わざわざ運んで、廃棄されるリスクを見込んで運ぶのは、伊勢側の流通に近い人物か、生産に近い半島側の人物か。その中間もありえようが、この一事によって、半島から出荷される山茶碗には、未製品も含められていたということになる。陶錘の様な漁労具が、この段階から生産されるということは、沿岸部の漁民と陶器生産者とが結びついてきた可能性もある。あるいは、沿岸部の漁労民が小船をもって伊勢湾を行き来したということも考慮すべきであろうか。いずれにせよ、窯跡には大量の失敗品が廃棄されている。そして、流通拠点となるような場においても選別は行われているということである。

山茶碗は、10～15枚程度が重ねて窯詰される。その重なりが自然釉で溶着した場合や、生焼けになったものは、窯場で廃棄されるとして、ほぼ手ごろな焼きあがりであれば、その重なりごと窯場から沿岸部まで運ばれ、伊勢の海を渡った可能性もあろう。それは、かさねて焼かれた塊であり、運搬には好都合である。いちいち選別して運ぶ労力と梱包の面倒を考えれば、運んだ先の流通拠点で選別した方が、リスクが少ないと考えることもできよう。この場合、山茶碗は、その程度の製品であったということになる。

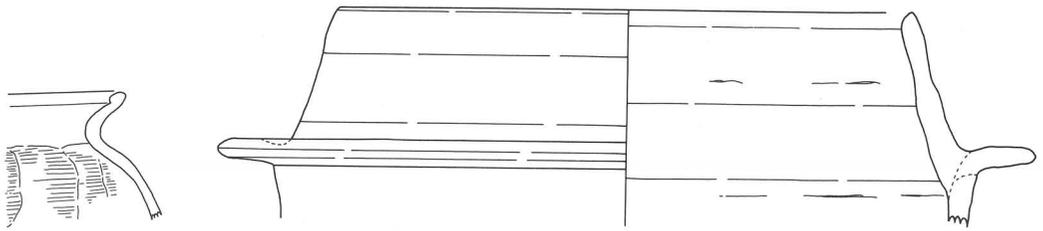
それでは壺甕の類は、どうなるだろうか。これらも、窯場において大量に廃棄されている。しかし、この甕で貯蔵具として使用に耐えないものを取って流通拠点まで運ぶのであろうか。焼成に伴って生じた変形の著しい甕が、消費地

遺跡で出土することは、稀に認められる現象である。焼台が底部に付着したままのものや、焼成中に亀裂の生じたものも関東地方で見た経験がある。しかし、そうしたもので遠隔地流通するという背景には、山茶碗のような選別と廃棄が、この器種では流通拠点で行われなかったということになるのではないだろうか。

山茶碗は、小船でもかなりの数を運ぶことができる。しかし、器高、最大径が60cmを越えるような大甕では、その数は知れたものである。そうなれば、運搬していった先で製品にならないと判断された場合、その流通にかかったコストが高いものにならざるをえない。大型船で大量に運ぶのであれば、そのコストを見込んで、一船ごとで売り買いし、多少の不良品が混じることも考えられなくはないが、大甕を大船で知多半島から積み出すということの中世前期の段階に描くのは無理があるのではないだろうか。

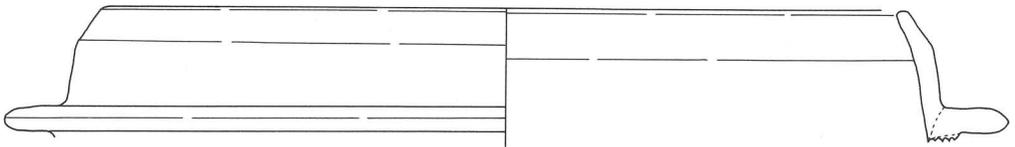
## 参考文献

- 『大曾公園古窯跡群発掘調査報告書』2001常滑市教育委員会
- 「中世知多古窯址群の押印文」中野晴久『知多半島の歴史と現在No. 4』1992日本福祉大学知多半島総合研究所
- 『松測古窯址群』1981常滑市教育委員会
- 「土錘」久保禎子『大毛沖遺跡』1996愛知県埋蔵文化財センター
- 『上之山』1992瀬戸市教育委員会
- 『土田遺跡』1987愛知県埋蔵文化財センター
- 『土田遺跡Ⅱ』1991愛知県埋蔵文化財センター
- 『広久手18・20・30号窯跡』2001瀬戸市埋蔵文化財センター
- 『愛知県知多古窯址群』1957愛知県教育委員会
- 『長曾古窯址発掘調査報告書』1991常滑市教育委員会

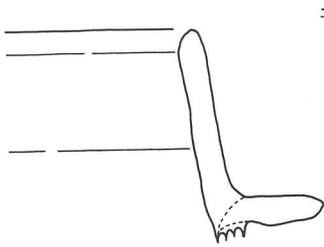


1-1

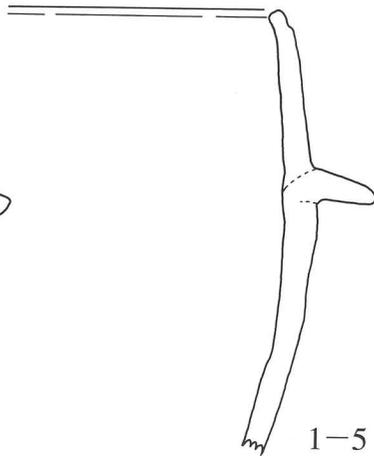
1-2



1-3



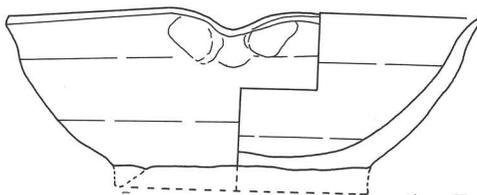
1-4



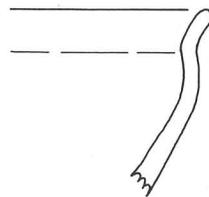
1-5



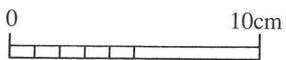
1-6

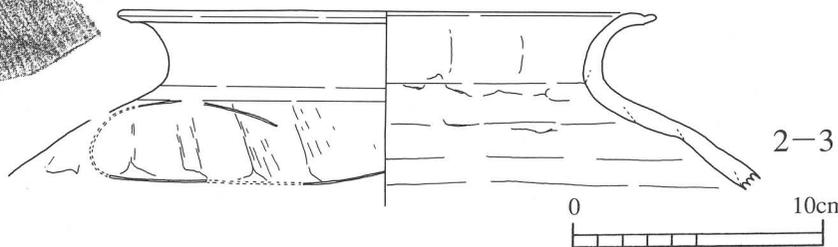
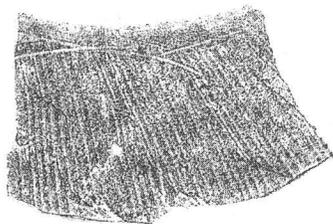
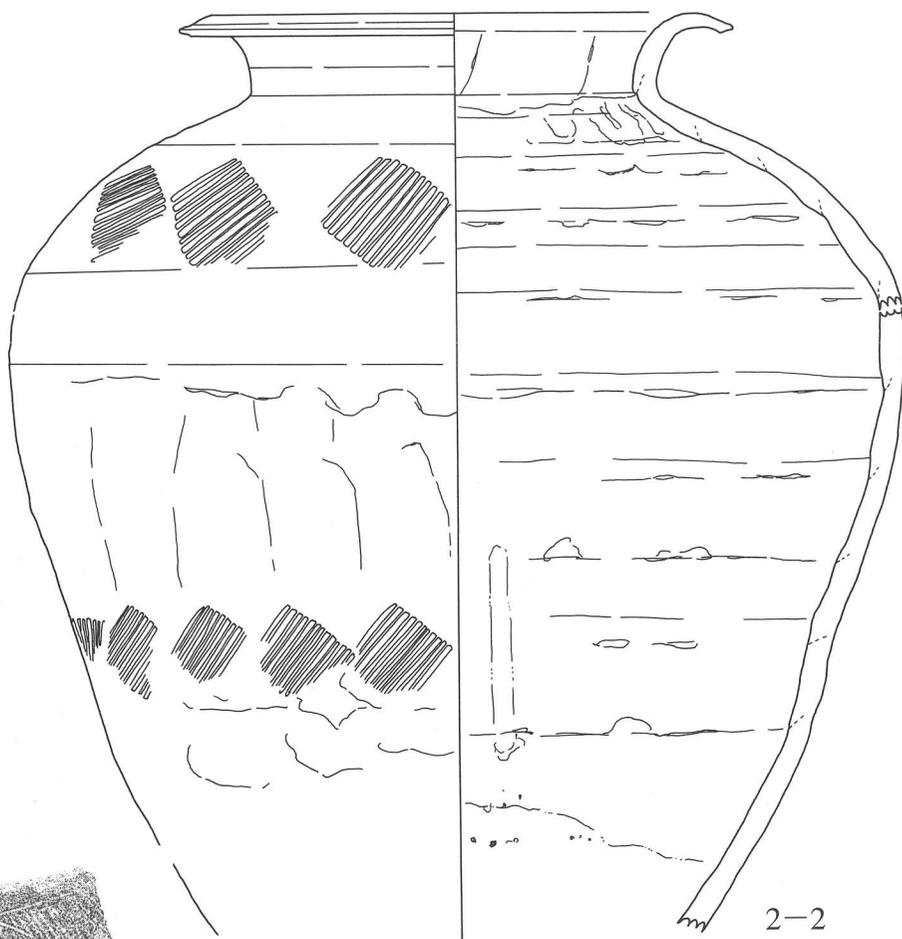
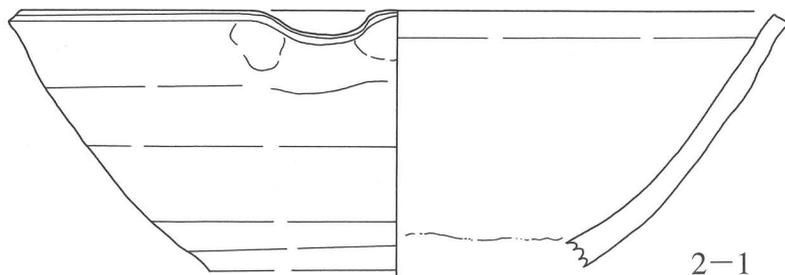


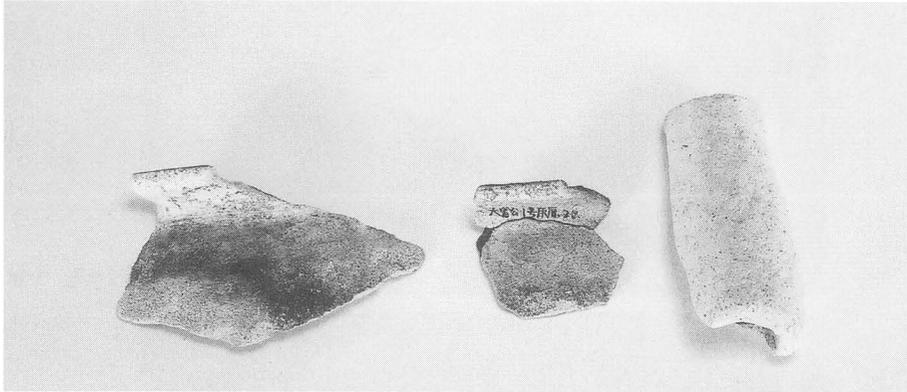
1-7



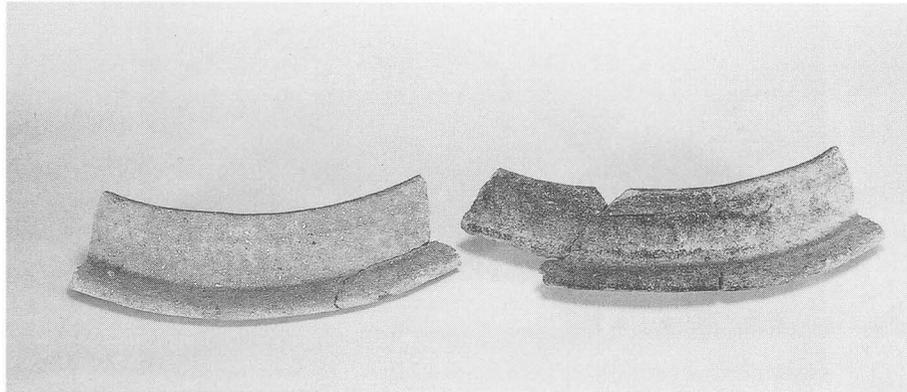
1-8







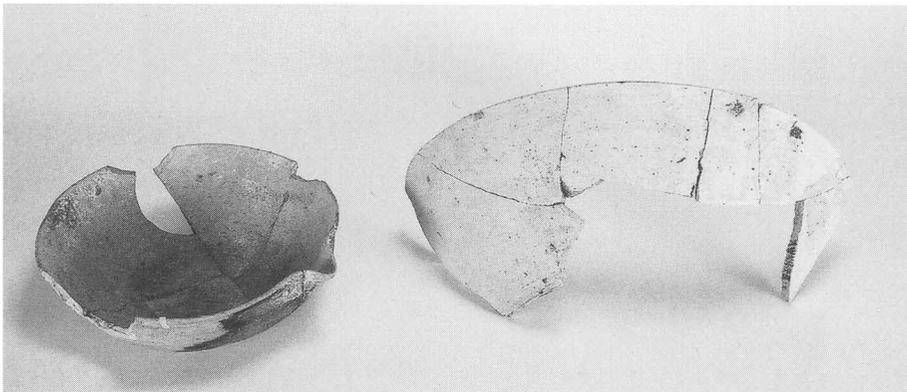
1-1, 1-6



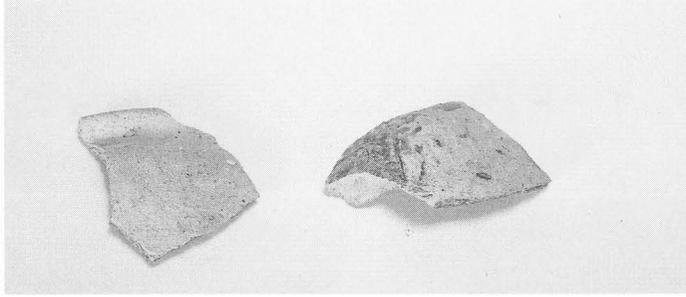
1-3



1-2, 1-5, 1-4



1-7, 2-1



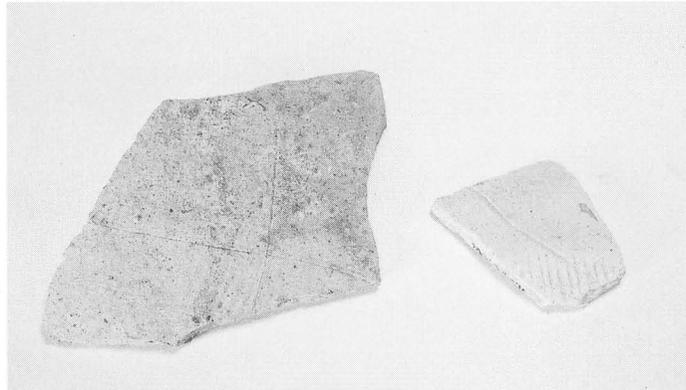
1-7、小壺



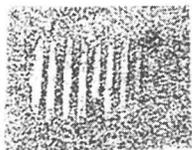
2-2



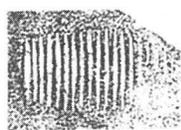
2-3



記号文2、記号文1



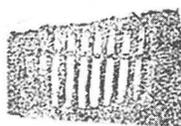
140



143



146



147



149



151



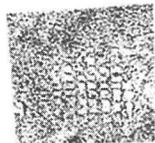
153



154



155



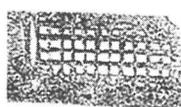
158



159



161



167



168



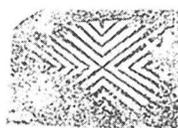
170



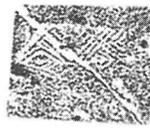
163



171



172



174



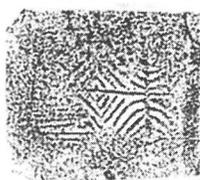
176



178



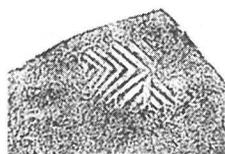
179



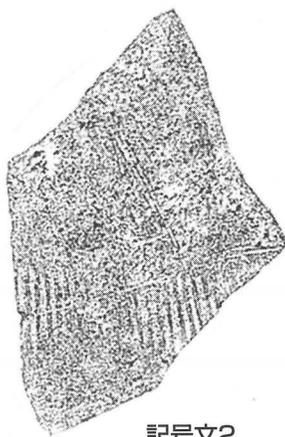
180



追加1



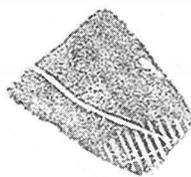
追加2



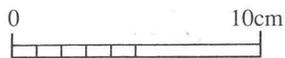
記号文2



小壺



記号文1



## 多賀神社棟札調査について

常滑市民俗資料館

中野晴久

菟屋の多賀神社の歴史は、菟屋地区のみでなく西浦地区全体にとっても、重要な意味を担っている。考古学的な研究は、この地域の丘陵部において中世、盛んな窯業生産が行われていたことを明らかにしているが、その人々の具体的な生活を物語る資料は、きわめて乏しいのが現状である。これに対し、地元に残る文字資料で中世末期から、今日まで継続して信仰の対象となっていることを確認できるのが、ほかならぬ多賀神社である。

神社の歴史は文献によって記録されることが少なく、その歴史は棟札によって、わずかに記録されるに過ぎないのが通例である。

多賀神社を崇敬してやまない岩田力夫氏は、神社の棟札を中心とした記録を調べ、その成果を後世に伝えることを年来の望みとしていたのであるが、平成12年12月17日、神官である岩田文夫氏の賛同を得、地元菟屋区の岩田裕、守山定両氏、そして常滑市民俗資料館・中野晴久の協力のもと、これを実施したのであった。当日の調査は、棟札の写真撮影と採寸、不鮮明文字の判読を中心としたが、朝から夕刻に及ぶ長時間の調査となった。撮影と判読は中野晴久と岩田裕両名が行い、採寸と記録を守山定氏が、これを担当した。

その後、1年間にわたり、主として岩田裕氏が記録と写真を元に解説書の基礎資料を作成し、岩田裕・岩田力夫の両氏が祭神別、年代順に写真整理をし、年表作成を行うなどの労をとったのであった。ここに、その成果がまとまったのであるが、粘り強く資料の整理を重ねてこられた両氏の労をねぎらいたい。

大永の七年(1528)に造立再興された藤原三所大権現こそが現在の多賀神社の基盤である。三所大権現とあるからには熊野三所権現との関係を探らねばならない。そして政所鶺飼左近尉實為とあるは、菟屋城主鶺飼氏と結びつくはずである。大工六郎エ門は、その後の菟屋の伝統ともなる宮大工の祖と推測できる。

慶長の九年(1604)に初出の山神殿は、本来別の地点に造営された祠であったが明治期の神社合祀で、この地にもたらされたものであろう。

今日、お多賀さんの名で親しまれる多賀神社は元和七年(1621)に新たに近江

多賀大社より勧請された多賀大明神をまつたことに始まる。

現在の社殿の中央には富士浅間神社がある。棟札での初現は、明治11年と遅いが、これは屋根の葺きあげであり造立ではない。江戸初期の寛文年間にまとめられた『寛文村々覚書』の苧屋村には社式ヶ所 内 富士権現 山之神と記載されている。

藤原三所大権現は、安政三年(1856)の棟札を最後に姿を消し、人々の記憶からも忘れ去られていった。ほぼ五百年にわたり営々護られてきたこの神社にも、さまざまな変遷があったことを棟札の調査は教えてくれた。この資料をさらに読み解いていくことで、また新たな歴史の頁を加える事ができるはずである。そして、今我々がこの資料から多くの知見が得られるように、後の世代においても苧屋の昔をたどり、認識を新たにしうる基盤となるべく、この資料が伝えられていくことを切望する。

和曆年西曆 干支	事業・社名	庄屋・惣代・区長	大工・葺師・石工・等	社掌・組頭・氏子惣代・諸役	備考
大永七年 (一五二七) 丁亥十月□日	造立再興御社二字 藤原三所大権現	願主 益倉首座□王大夫 潮月道源形部三郎 政所 鵜飼左近尉實爲	大工 藤原民六郎衛門	祢宜 藤川□近 走衆 □□衛門	
天文二十年 (一五五二) 辛亥 月十三日	再興御社一字 藤原三所大権現	願主 庄十兵衛吉定 政所 鵜飼實隆	大工 藤原氏左三門五郎敬白		
慶長九年 (一六〇四) 甲辰□月七日	山神殿一社		大工 六郎左衛門 藤原朝臣重□		
元和貳年 (一六一六) 丙辰 月二日敬白	再興御社二字 藤原三所大権現	願主 橋爪八右衛門殿 庄屋 長田半□郎	御手代衆 渡辺太兵衛殿 丹羽左衛門殿 大工 清右衛門 小工 李衛門	庄司右三門 與左衛門 與三右衛門	
元和七年 (一六二二) 極月十五日	新建立 多賀大明神社二字	當郷爲想禰那与建立宮也	大工 左衛門五郎	祢宜 李右衛門	
元和七年 (一六二二) 極月十五日	勸請 多賀大明神社	當郷爲想禰那与新建立社成就			

寛永十一年（一六三四） 杳月六日	寶生院		左衛門五郎		
寛永拾貳（一六三五） 乙 亥九月五日	建立再興 御社一宇 藤原二所大権現	願主 庄司兵衛	大工 藤原左之門五郎重次	当村 惣目那衆中	
万治元年（一六五八） 戊戌十一月十七日	建立再興 御社一宇 藤原二所大権現	願主 當村惣權那衆中 庄屋 盛山六郎平	大工 平朝臣盛山佐傳次重滿 折衆首 傳應次 栓皮大工 藤原金二郎	組頭 理左之門 賀兵衛 武兵衛	
万治二年（一六五九） 己亥十一月廿日	再建立 山神一社	願主 清石之門	大工折衆首傳應 藤原朝臣金左衛門		
寛文三年（一六六三） 癸卯九月十三日	再建立拜殿一宇		大工 平朝臣盛山佐衛門五郎		

寛文九年（一六六九） 己酉七月十一日	再建立 山神一社	庄屋 六郎左衛門	大工 平朝臣盛山佐衛門五郎	祢宜 佐助 与頭 久兵衛 八兵衛 佐四郎	
延寶四年（一六七六） 丙辰卯月廿五日	再建立 多賀大明神一社	庄屋 六郎左衛門	大工 平朝臣盛山佐衛門五郎重 滿	与頭 八兵衛 五兵衛	別當高讀寺法印
貞享二年（一六八五） 乙丑六月三日	再建 藤原三所大権現	願主高村物目那兼中 庄屋 六郎左工門	大工 平朝臣盛山佐衛門五郎重 滿 摂州首傳應次 桧皮葺師 金三郎	与頭 又兵衛 金左工門	
貞享二年（一六八五） □□六月七日	再建立 山神一社	庄屋 六郎左工門	大工 平朝臣盛山佐衛門五郎	与頭 又兵衛 庄兵衛	

元禄六年（一六九三） 千酉秋八月一日（ママ）	上葦 多賀大明神一宇	庄屋 六良兵衛尉	大工 守山佐傳次	組頭 庄兵衛 又兵衛	
寶永七年（一七一〇） 庚寅六月吉辰日	上葦 多賀大明神	庄屋 守山六郎兵衛	大工 佐傳次	知多郡新屋村中	別當高讀寺法印智法天和尚
寶永七年（一七一〇） 庚寅六月吉辰日	再建立 山神一社	庄屋 守山六郎兵衛	大工 佐傳次	知多郡新屋村中	別當高讀寺法印
正徳四年（一七一四） 甲午十一月十六日	再建立一宇 藤原三所大権現	庄屋 守山六郎兵衛	大工 藤原氏佐傳次	尾州刈屋村氏子物建立 組頭 鈴木又兵衛 守山佐七	高讀寺法印智法
享保十五年（一七三〇） 庚戌八月吉禊日天	再建立一宇 藤原三所大権現	名主 守山六郎兵衛影信	大工 藤原朝臣 守山定助重長	組頭 守山長左工門 鈴木又七郎 関 半兵衛	高讀寺大僧都法印智舟

<p>享保十五年（一七三〇） 庚戌八月吉祥日</p>	<p>再建立山神一社</p>	<p>庄屋 守山六郎兵衛</p>	<p>大工 定助</p>	<p>知多郡刈屋郷中</p>	<p>高讀寺法印大和尚</p>
<p>享保十五年（一七三〇） ○ 庚戌八月吉祥日</p>	<p>再建立 藤原三所大権現鳥居</p>	<p>庄屋 守山六郎兵衛</p>	<p>大工 □□</p>	<p>知多郡刈屋村中取立</p>	
<p>享保十五年（一七三〇） ○ 庚戌</p>	<p>葺初 八月初五日 葺納 八月中旬</p>		<p>葺師 山田惣七郎</p>	<p>尾陽城南五條町住</p>	
<p>享保十九年（一七三四） 甲寅十一月吉祥日天</p>	<p>建立 多賀大明神一宇</p>	<p>庄屋 守山六郎兵衛影信</p>	<p>大工 守山定助重永</p>	<p>組頭 守山長左門 鈴木亦七郎 古川林右工門</p>	<p>別當高讀寺法印大和尚</p>

延享四年（一七四七）丁卯十月吉日	再建立 藤原三所大権現 一字	名主 守山八郎兵衛影信	大工 藤原朝臣守山定助重長	与頭 古川甚左衛門 鈴木亦七郎 守山長左衛門	高讀寺智峯
寶曆四年（一七五四）甲戌十二月廿七日天	上葺 多賀大明神一字	庄屋 守山八郎兵衛		組頭 守山長左衛門 鈴木亦七郎 古川甚左衛門	
寶曆八年（一七五八）六月吉日	大峯山護摩 金峯山東院				
明和四年（一七六七）亥三月十日天	上葺 藤原大権現	庄屋 守山長左衛門	大工 守山佐傳次		別當高讀寺現住 大阿闍梨堅著法印 智領大和尚
明和七年（一七七〇）庚寅二月八日天	上葺 多賀大明神	庄屋 守山長左衛門	大工 守山佐傳次	与頭 古川庄兵衛 木納新左衛門 古川庄次郎	別當高讀寺現住 大阿闍梨堅著法印 智領大和尚
明和七年（一七七〇）庚寅閏六月大吉日	雨請大行事				鏡味太郎太夫貞興

安永四年(一七七五乙未曆) 閏十二月吉祥日	再建立 山神一社	庄屋 長左衛門	大工 守山政富定助	組頭 庄兵衛 庄次郎	別當御嶽山高讀寺現任 傳燈大阿闍梨敬孝法印智嶺大和尚
天明三年(一七八三) 癸卯季九月廿三日	上葺 藤原大権現	庄屋 守山宇兵衛	大工 守山佐傳次	組頭 与右工門 庄左工門 徳左工門	別當御嶽山高讀寺現任 傳燈大阿闍梨法印智嶺大和尚
天明三年(一七八三) 癸卯稔九月廿三日	上葺 多賀大明神	庄屋 守山宇兵衛	大工 守山佐傳次	組頭 与右工門 庄左工門 徳左工門	別當御嶽山高讀寺現任 傳燈大阿闍梨法印智嶺大和尚
寛政三年(一七九二) 辛亥十一月十日	再建上葺 藤原大権現	庄屋 守山宇兵衛	大工 守山六郎左工門 同 佐右工門	組頭 岩田彦右工門 岩田徳左工門 古川庄兵衛	別當御嶽山高讀寺現任 傳燈権小都佐主
寛政四年(一七九二) 壬子六月十四日	再建立 山神一宇	庄屋 守山宇兵衛	村中安全	組頭 岩田善右衛門 古川与右衛門 古川平左衛門	別當御嶽山高讀寺現任智門代
享和三年(一八〇三) 癸亥九月十一日	上葺遷宮 多賀大明神	庄屋 岩田利右工門	大工 守山六郎左工門真盛	組頭 岩田善右衛門 古川与右衛門 古川平左衛門	別當御嶽山高讀寺現任 大阿闍利権大僧都法印惠純

文政二年(一八一九)己卯年六月	建立高欄	庄屋 岩田善右工門	大工 岩田定八 守山左衛門 守山種吉	組頭 古川甚八 岩田仁右衛門 岩田利右衛門	
文化九年(一八二二)壬申十一月朔日	葺替修復 社名不記	庄屋 岩田善右工門	大工 守山六郎左工門重盈 岩田定八	組頭 古川文四郎 米田新右工門 守山儀右工門	
文化八年(一八一二)未□四月吉拜日	再建立 神一社		大工 守山六郎左工門重光	組頭 古川文四郎 同断 岩田喜左工門 同断 米田新右工門	
文化七年(一八一〇)庚午六月初四日	上葺修補遷宮 藤原大權現	庄屋 古川平左工門	大工 守山六郎左工門	組頭 古川文四郎 岩田喜左工門 米田新右工門	別當御嶽山高讀寺現住 大阿闍利權大僧都法印惠純
文化七年(一八一〇)庚午六月初四日	上葺修補遷宮 多賀大明神	庄屋 古川平左工門	大工 守山六郎左工門	組頭 古川文四郎 岩田喜左工門 米田新右工門	別當御嶽山高讀寺現住 大阿闍利權大僧都法印惠純
享和三癸年(一八〇三)癸亥九月十一日	上葺遷宮 藤原大權現	庄屋 岩田利右工門	大工 守山六郎左工門重盈	組頭 岩田善右衛門 古川与右衛門 古川平左衛門	別當御嶽山高讀寺現住 傳燈大阿闍利賢者大僧都法印惠純

文政六年（一八三三） 癸未年正月 十五日	上葺遷宮 藤原大権現	庄屋 古川庄兵衛	大工 岩田定八	組頭 岩田利右衛門 金王川治左衛門 古川藤藏	別當御嶽山高讀寺現住 大阿闍利権大僧都法印惠純
文政六年（一八三三）癸 未年正月 十五日	上葺遷宮 多賀大明神	庄屋 古川庄兵衛	大工 岩田定八	組頭 岩田利右衛門 金王川治左衛門 古川藤藏	別當御嶽山高讀寺現住 大阿闍利権大僧都法印惠純
文政六年（一八三三）七 月吉日	大峯柴修護摩				
天保四年（一八三三） 巳五月廿一日	修復屋棟替 社名不記	庄屋 岩田喜郎		組頭 古川與六衛門 三好喜左衛門 米田新右衛門	
天保十二年（一八四一） （一）辛丑六月大吉曜日	上葺遷宮 藤原二所大権現一宇	庄屋 岩田喜三良	大工 守山佐右衛門 岩田定八	組頭 岩田徳左衛門 古川平左衛門 古川清左衛門 別當御嶽山高讀寺八十八世	別當御嶽山高讀寺八十八世 権大僧都法印惠明
天保十二年（一八四一） 辛丑六月大吉曜日	上葺遷宮 多賀大明神一宇	庄屋 岩田喜郎	大工 守山佐右衛門 岩田定八	組頭 岩田徳左衛門 古川平左衛門 古川清左衛門 尾陽刈屋村	別當御嶽山高讀寺八十八世 権大僧都法印惠純

天保十五年（一八四四） 辰十月	殿様より褒美 白羽の矢一本	庄屋 喜三郎		組頭 金兵衛 同断 清左衛門 同断 宇兵衛	刈屋村 御調達上ヶ金二付
弘化三年（一八四六）丙 午 五月吉日	再建石壇 石寄附主 盛田久左衛門 門 中野半六	庄屋 岩田喜二郎	石工 下半田村 近藤幸吉 新美嘉与太郎 近藤嘉七	組頭 守山宇兵衛 岩田理左衛門 鈴木左平 定使 関与三郎	
安政三年（一八五四）丙 辰 七月良辰	上葺遷宮 藤原大権現	庄屋 岩田善右衛門	大工 守山佐右衛門 岩田定八	組頭 古川庄治左衛門 山本文七 古川平左衛門	別當御嶽山高讀寺八十九世 少阿闍梨瑜伽若惠海
安政三年（一八五四）丙 辰 七月良辰	上葺遷宮 多賀大明神	庄屋 岩田善右衛門	大工 守山佐右衛門 岩田定八	組頭 古川庄次左衛門 山本文七 古川平左衛門	別當御嶽山高讀寺八十九世 少阿闍梨瑜伽若惠海
安政五年（一八五八） 戊午三月廿八日	覆屋根替 社名不記	庄屋 岩田善右衛門	大工 岩田定八	組頭 古川平左衛門 米田新右衛門 岩田治左衛門	天下泰平 日月清明 五穀成就 村中安全

<p>明治二十九年（一八九六）三月十八日</p>	<p>明治十一年（一八七九）四月五日</p>	<p>明治十一年（一八七九）四月五日</p>
<p>上葺 大山祇神社</p>	<p>上葺 多賀神社</p>	<p>上葺 富士浅間神社</p>
<p>蒔屋村長 古川増太郎 助役 守山為三</p>	<p>用係 古川庄次左衛門 古川増太郎</p>	<p>用係 古川庄次左衛門 古川増太郎</p>
<p>大工 岩田秀次郎</p>	<p>大工 守山佐右衛門 岩田定八 古川民藏 岩田七右衛門 古川市藏 岩田藤太郎 守山六良左衛門 葺師 伊藤源四郎</p>	<p>統領（ママ）守山佐右衛門 大工 岩田定八 古川民藏 岩田七右衛門 古川市藏 岩田藤太郎 守山六良左衛門 葺師 伊藤源四郎</p>
<p>社掌 高松登一</p>	<p>祠官 永井紘 松田四郎 祠掌</p>	<p>祠官 永井紘 松田四郎 祠掌</p>
	<p>氏子総代 山本文七 鈴木佐平 村中安穩 五穀成就</p>	<p>氏子総代 山本文七 鈴木佐平 村中安穩 五穀成就</p>

<p>明治三十七年（一九〇 四）二月七日</p>	<p>明治三十七年（一九〇 四）二月七日</p>
<p>上葺 富士浅間神社</p>	<p>上葺邊宮 多賀神社</p>
<p>村長 古川増太郎</p>	<p>村長 古川増太郎</p>
<p>大工 守山佐右工門 古川民藏 岩田藤太郎 岩田秀次郎 守山六郎左工門 古川桂太郎 古川重太郎 関 佐太郎 岩田冨次郎 濱崎弥二郎 伊藤源四郎</p>	<p>大工 守山佐右工門 古川民藏 岩田藤太郎 岩田秀次郎 守山六郎左工門 古川桂太郎 古川重太郎 関 佐太郎 岩田冨次郎 濱崎弥二郎 伊藤源四郎</p>
<p>社掌 高松久重</p>	<p>社掌 高松久重</p>
<p>氏子総代 米田政藏 古川昇平 岩田吉太郎 鈴木佐平 古川房吉 古川萬太郎</p> <p>五穀成就 村中安奎</p>	<p>氏子総代 米田政藏 古川昇平 岩田吉太郎 鈴木佐平 古川房吉 古川萬太郎</p> <p>造營係 岩田吉太郎 鈴木佐平 古川房吉 古川萬太郎</p> <p>五穀成就 村中安奎</p>

<p>大正十三年（一九一四） 甲子八月八日</p>	<p>大正十三年（一九一四） 甲子八月八日</p>
<p>上葺 軍十淺間神社</p>	<p>上葺 多賀神社</p>
<p>大字総代 正元市太郎 副総代 鈴木佐兵衛</p>	<p>大字総代 正元市太郎 副総代 鈴木佐兵衛</p>
<p>大工棟梁 古川重太郎 葺師 伊藤源四郎</p>	<p>大工棟梁 古川重太郎 葺師 伊藤源四郎</p>
<p>社掌 高松登一</p>	<p>社掌 高松登一 議員 古川庄八 山本堂三郎 岩田徳太郎 岩田豊次 守山養之助 松田金松 関 伊三郎 岩田猶次郎</p>
<p>造幣係 岩田吉太郎 五穀成就 岩田清次郎 村中安全</p>	<p>造幣係 岩田吉太郎 岩田清次郎 氏子総代 古川建吉 古川昇平 岩田鶴松</p>

<p>大正十三年 (一九二四) 甲子八月吉日</p>	<p>昭和三年(一 九二八)月 一日</p>
<p>上葺 山神社</p>	<p>御大典記念 石玉垣竣功</p>
<p>大字総代 正元市太郎 副総代 鈴木佐兵衛</p>	<p>字総代 守山才助 副総代 山本常三郎</p>
<p>大工棟梁 古川重太郎</p>	<p>石工 関繁 大工 古川重太郎</p>
<p>社掌 高松登一 議員 古川庄八 山本常三郎 岩田徳太郎 岩田豊治 守山養之助 松田金松 関 伊三郎 岩田猶次郎</p>	<p>社掌 高松定久 字云議員 岩田豊次郎 岩田甚太郎 岩田猶次郎 古川林吉 岩田長之助 古川伊太郎 岩田晴吉 森下弥太郎 山本弥吉 岩田健一 松田金松</p>
<p>造営係 岩田吉太郎 岩田清次郎 氏子総代 古川建吉 古川昇平 岩田鶴松</p>	<p>造営係 岩田吉太郎 岩田清次郎 氏子総代 古川建吉 古川昇平 岩田鶴松</p>

<p>昭和十五年 (一九四〇) 九月起工式 昭和十六年一月五日 昭和十七年十二月二十 三日</p>	<p>昭和二年 (二九八) 戊辰 月</p>
<p>奉鎮祭本殿 並付帶工事 御殿遷座 竣工式 多賀神社</p>	<p>改修并欄 寄附者 厄年二十四名</p>
<p>大字総代 関庄松</p>	<p>字総代 守山才助 副総代 山本弥吉</p>
<p>大工 守山佐右門 岩田八十八 岩田敬四郎 稲葉孫一 設計岡崎 市川清作</p>	<p>石工 関繁</p>
<p>社司 畔榎守道</p>	<p>社筆 高松定久</p>
<p>氏子総代 正元市太郎 岩田清太郎 山本弥吉 岩田臺三郎 米田幹一</p>	<p>氏子総代 古川建吉 古川昇平 正本市太郎 岩田健一 岩田廣吉 發起人 古川善平 古川伊太郎 岩田栄助 米田伊之助 古川松太郎</p>

<p>昭和十六年（一九四一） 九月二十日</p>	<p>昭和三十一年（一九五六） 四月二十日</p>	<p>改築社殿 山神社</p>
<p>上葺 山神社</p>	<p>上葺 富士浅間神社</p>	<p>寄附者 米田幹一 守山六郎左工門 永田春蔵 古川友吉 岩田繁</p>
<p>区長 鈴木佐兵 副区長 古田操</p>	<p>区長 鈴木佐兵 副区長 古田操</p>	<p>大工 守山佐右工門 岩田八十八 岩田敬四郎 稲葉孫一 吉原常吉</p>
<p>宮司 岩田苗麿</p>	<p>大工棟頭 守山佐右工門 古川常吉 岩田繁 葺師 伊藤源四郎 森下安平</p>	<p>社掌 畔柳守道</p>
<p>氏子総代 岩田喜一郎 米田幹一 岩田濟一 古川伊太郎 永田源造</p>	<p>氏子総代 岩田喜一郎 古川伊太郎 岩田濟一 米田幹一 永田源造</p>	

<p>昭和五十四年（一九七九）十一月</p>	<p>昭和四十一年（一九六七）</p>
<p>建立客殿</p>	<p>上葺 多賀神社</p>
<p>区長 早川 博 大工 古田建築</p>	<p>区長 永田邦雄 副区長 岩田俊治</p>
<p>土工事 平野由一 左官 岩田タイル枝工所 右工事 古川石材店 電気 古川電気工事 屋根 岩田進 水道 岩田工業所 建具 中野建具店 畳 久田畳店 板金 紫田板金</p>	<p>大工 岩田達三 古川喜重 岩田喜一 岩田慶弼 浜崎忠一</p>
<p>神宮 岩田重一</p>	<p>宮司 岩田重一 市会議員 鈴木佐兵 区会議員 稲葉四郎 森山本雄 守山六郎 岩田辰勇 古川日吉 亀頭時二 岩田功 関重行 岩田弘治 古川政平 古川甚善</p>
<p>氏子総代 守山六郎 古川明 永田邦雄 古川誠造 岩田裕</p>	<p>氏子総代 古川亀助 古川源司 岩田利兵 守山本男 吉田 操</p>

<p>平成七年（一九九五） 二月六日</p>	<p>改築 山神社</p>	<p>区長 岩田勝年</p>	<p>棟梁 末広工業株式会社 奉納 岩屋法徳会</p>	<p>宮司 岩田重一 祓宜 岩田文夫</p>	<p>氏子総代 岩田力夫 岩田剛 岩田時夫 守山稔 前田明伯 古川善助 岩田吉司 岩田喜一郎 永田友男 古川日出夫 守山定 岩田幹男 松田宣夫</p>
----------------------------	-------------------	----------------	---------------------------------	----------------------------	---

## 多賀神社棟札随想

岩田 裕

この度、志を同じくする者相集いて、多賀神社棟札及び諸札の調査を行った事は、民俗資料館中野学芸員が詳しく記載されたところである。ここで、その編集に参画した一員として、あとがきに将来の参考になるかと思われることなどを書き添えておきたい。

往古この地に里人住みつき、集落を形成するに当っては、その所を選び、山を拓き、杜を育て、社を作って神の依代としてきたのであった。そして、その社は氏子たちの心の依り所として、幾世代にもわたり厚く守られてきた事は、今も変わらぬところである。

最古の棟札が大永七年の年号を持ち、「政所」の記載などから、荊屋城主と結びつくであろうことは、すでに中野学芸員が述べているが、元和二年（1616）の棟札を見ると、ここに初めて庄屋の名が登場している。そして、その名が長田姓であることは注目される場所である。あるいは、中世、野間内海荘の庄司長田氏の系類に連なるものであろうか。その真偽は定かになしがたいものの、江戸初期の邑長は、それ相当の由緒をもつ人物が就いたと見るべきであろう。

後述する守山家においても、万治元年（1658）より宝暦四年（1754）まで数代にわたって庄屋を続け、その名からも相当な勢家であったと考えられることから、この長田氏の由緒も推測される場所である。

また、文政六年（1823）の組頭に金王川姓がある。中世の物語に登場する澁谷金王丸は、今も残る溝川に身を伏せたので、この地ではそうした所作を「金王隠れ」と謂い伝えてきた。そして、その川の名前も金王川と称してきたのであった。こうした物語が、どれほど史実といえるかは、なお研究の余地が多く残されているが、江戸時代の姓には確実にその史話が反映していることは注目しなければならない。

また、ここで特筆しておきたい事として、昭和15年の皇紀二千六百年の記念事業をとりあげておきたい。多賀神社は、この記念事業として大幅に改築され、併せて境内地も大改修がおこなわれたものであった。この改修の結果として近郷に比類なき立派な神社が出来たのであるが、これにはその当時としては莫大

な費用と三ヶ年に渡る時間が費やされたのであった。氏子の熱心な労力奉仕の賜と言わねばならない。最若年ではありながら、この奉仕事業に参画し、多くの経験をしたことを今も鮮明に記憶している。(詳細は、この関連の棟札にあり。)

尚、この調査については、経緯にある通り、写真撮影より始めたのであるが、棟札の写真撮影については昭和48年5月、東京大学史料編纂所の岩澤愿彦教授他二名の研究者が苅屋公民館を宿所として調査されたことがあった。その当時区長であったので、この調査に立ち会ったこともある。そして、同様の調査は昭和58年にも常滑市教育委員会の手で行われている。

過去の調査では、その成果のごく一部分しか公開されておらず、今回の調査資料によって、はじめてその全貌が明らかになったとあってよい。今回の資料では全棟札の写真と、その解説、そして年表までを加えて資料簿を作成した。この資料は複数を作り、その一部は常滑市民俗資料館にも保管方依頼し、他は然るべき方策にて保管する事を調査代表者より依頼することとした。あつてはならないことながら、隣村氏神の中には災禍に遇い、木片の一部も残らないような事態がないとも限らないのである。神社の記録、村の歴史の消える事のないことを願うばかりである。

※古い棟札で墨書が判読できない部分には□印をつけ、現代用語で解釈出来ない字は「ママ」のルビをつけてある。向後の識者の賢察を乞うところである。

平成14年3月25日

常滑市民俗資料館

## 研究紀要 X

編集	常滑市民俗資料館
発行	常滑市教育委員会
印刷	株式会社 興起社



常滑市民俗資料館

研究紀要 X

二〇〇二

常滑市教育委員会

# 目次

内藤陽三伝について	………	2
故内藤陽三傳(資料)	………	10

## 内藤陽三伝について

常滑市民俗資料館 中野晴久

### 1 はじめに

常滑の陶芸の中で特異な存在とすることができる分野に陶彫がある。陶彫とは粘土を用いて造形した塑像を陶器質に焼き上げたもので、彫刻の一分野とすることができる。この陶彫は、常滑の陶芸の中では、近世期に成立すると見る事ができる。

近世期の陶彫は、恵比寿・大黒・布袋像などに代表される縁起物や各種の仏像、唐獅子といった題材であり、小型の置物といった体裁を保っているのが通例である。二代伊奈長三や上村白鷗などは、こうした陶彫作品の作者として古くから知られた人物である。長三作の布袋や寿老人像は、現存しており白鷗においては、大黒天像や唐獅子が知られている。

置物以外に、この塑像技法を用いて器物としたものに香合や香炉がある。白鷗の作品に靈龜を象った大型香炉があり、小槌に鼠をあしらった香合や亀の香合なども少なくない。白鷗の孫にあたる上村信吉の遺作にも象をかたどった大型の香炉がある。そして、こうした陶芸家は、塑像の技法に熟練しつつも、多くは茶道具を中心とした器物を作る事で、その作家としての評価をうけていたと考えられる。香合など具象的な表現を求められる作品は、彼らの技量がもっともよく発揮できる器物ということになる。

### 2 陶彫家の出現

主として陶彫作品を作り、器物をほとんど制作しない陶彫家は、常滑においては明治以降にならないと出現してこない。しかも、その分野は旧来の伝統的な塑像技法とは異質な基盤をともなつて出現したと見る事ができる。

それは、明治16年に開設された常滑美術研究所の教師として招聘された内藤陽三（号・鶴嶺）と、その学友で金山・鯉江窯に迎えられた寺内信一（号・半月）の両名が基盤を築いたといつても過言ではないほど重要な役割を果たしたと考えられる。

そして、この両名の事跡については、古い段階から記録に残されており、その内容は珍しく詳細である。たとえば常滑の窯業史を研究するうえでバイブル的な存在である『常滑陶器誌』は、内藤鶴嶺について生年、号の由来、学歴と常滑に來た経緯を簡潔に述べ、常滑を去りベルリンに赴く背景と、そこでの活動、そして不帰の人となつた事情を解説している。彼が常滑に滞在したのは、明治16年から同18年にかけて足掛け3年、実質2年でしかない。いかに斬新な技芸であつたとしても、その扱いは大きすぎる。

これについては、学友の寺内信一が、内藤の後任として美術研究所の所長兼教師を受け継ぎ、明治21年まで、その指導を行っている。しかし、寺内はその後瀬戸や美濃に活動の場を移し、明治45年ころは中国、長沙の高等工業学校で窯業を教授していたのである。そして、大正6年、帝国ホテルのテラコッタ製造にあたり、技術顧問として佐賀県から再度招聘されたものの、この時の滞在もわずか1年ほどでしかない。

この両名の指導を美術研究所において受けたのが平野六郎（号・霞裳）であつた。明治6年生れであるので明治18年は満12才になる。その彼こそは、やがて常滑工業補習学校、常滑陶器学校で彫塑を多くの子弟に教え、陶彫家を育成した人物であつた。

### 3 内藤鶴嶺略伝

愛知県知多郡役所が編輯兼発行者になり大正12年3月31日に発行した『知多郡史』は上中下三冊で構成されている。その下巻におさめられた「第三篇 雑史」の「第二章 産業の発達」の中に「内藤鶴嶺略伝」があるのである。この13頁に及ぶ文章は、「内藤鶴嶺略伝」「鶴嶺終焉」「鶴嶺逝後」の三部構成になり、冒頭のタイトル下に括弧書きで寺内信一氏述となっている。

寺内信一述とは、口述ではなく記述したものであることが、その文章を読み進むうちに判明する。そして、内藤陽三・鶴嶺の経歴が常滑になぜこれほど詳細に伝わったのかも、この記述によって明らかになった。つまり、明治22年に内藤がシンガポール香港間の洋上で客死した後、親友であった寺内は悼惜の念に堪えず、上京して事の顛末を知る在京の友人達に尋ねておいたのだが、その時は果たさずに、明治25年の夏に時間があつたので整理箱を開くと、鶴嶺の消息が山のように入っていた。それを読みつつ涙をこぼし、旧友のことを想い、一日をかけてこの略伝を書いたものであると。

そして、『知多郡史』の編纂者は、寺内の記述したものを活字化したのであろう。この編纂者の人名は、書中に記されており、また、この部分の担当者も当然のごとく書かれていない。郡役所の担当者が、郡内の町村役場や学校などの機関に連絡して、歴史的資料を収集し、その中から選択して掲載したということであろうか。

『知多郡史』の「内藤鶴嶺略伝」と先の『常滑陶器誌』の内藤陽三についての記述を比較すると、明らかに共通しており、陶器誌も寺内作の伝記を見て要約したものであることが判る。

### 4 故内藤陽三伝

平成11年秋に常滑市民俗資料館で開催した『常滑陶業の100年』展は、とこなめ焼共同組合の母胎である常滑陶器

同業組合の成立100周年を記念する企画であった。そして、この企画にあたり、常滑市立陶磁器会館に所蔵されていた資料を見ると、少ないながら前身の常滑陶器館時代の資料があり、その中に『故内藤陽三傳』も含まれていたのである。

もともと、常滑陶器館は昭和5年に建った施設であり、この伝記はそれより、はるかに古いものである。それは、縦27・2 cm、横39・8 cmの和紙を袋綴じにし、36頁にわたって毛筆手書きされた冊子であった。表紙には「故内藤陽三傳 写 寺内信一作」とあり、「亡友内藤鶴嶺略傳 寺内信一述」「鶴嶺終焉」「鶴嶺逝後」という構成になっている。これは、その構成、タイトルの一致からして明らかに『知多郡史』の「内藤陽三略傳」の原本であると考えるものである。

表題と作者の間にある「写」の文字は、原本を写したものの意味にも取れるが、そうであるならば写した人物の署名がどこかにあつてしかるべきだが、この冊子のどこにもそうした記載は見当たらない。あるいは、作者の寺内が写本を何冊か作り関係方面に配布したために、あえて「写」を入れたとも考えられる。

この問題について関連するのは、「鶴嶺逝後」の部分に鶴嶺の遺子が、祖父に養われることになったくんだりで貼り紙があり、そこに「遺子鋼一郎氏 明治四十二年大阪医学校ニ在留ス」と記されている。その筆跡は、やや硬くなつてはいるが本文のそれに類似していると見うけられる。

つまり、原本は明治25年に作成し、明治42年の段階で新たに写本を作り、そこに新しい情報として貼り紙をしたか、または明治25年段階で何冊かの写本を作成してあり、もとめに応じて配布したのだが、新しい情報はそのつど貼り紙型式で加えられたと見る見方が成り立つであろう。

そして、明治42年という年は、『常滑陶器誌』の刊行が明治45年1月とあり、その企画から編修作業を考えると、この陶器誌編纂の企画が持ちあがつたころの時期とも推測可能な年であろう。さらに、この本の巻頭例言には、井

上素三、平野六郎、藤井廣吉の三氏に多大な助力を与えられたことが述べられている。井上素三は名工として数えられる常滑の陶工であり、また常滑の古作品の鑑定も行っている人物である。さらに自身のコレクションも、この本に写真掲載されている。藤井廣吉は常滑の写真と印刷業のパイオニア的人物であり、本書に掲載された写真は同氏の撮影になるものである。そして、平野六郎については、すでに内藤・寺内との関係で紹介したが、常滑の窯業史に関しては最も該博な知識をその当時持ち合わせていた人物である。

因みに編者にして著作者となった瀧田貞一は、その当時の家業が木綿問屋の店主であり、発行母胎となった常滑町青年会の会長であった。特に常滑の窯業史に通じていたわけではないことから、平野六郎の関与は不可欠であったと推測できるものである。想像を逞しくすれば、瀧田からこの話を持ちかけられた平野は、いろいろな資料を収集する中で恩師である寺内にも、その協力を依頼したとも考えられよう。

『知多郡史』との比較を行うと、全体の文章は完全に一致している。しかし、仮名遣いや文字の違いは文意を損なわぬ程度ながら、随所に認められた。書体はかなりくずしてあり、変体仮名もふんだんに使われているため、誤読もあり得ようが、かなり急いで読み解いたのではないかと思われる節がある。

## 5 内藤陽三・鶴嶺について

わずかに30年の生涯であり、内藤陽三・鶴嶺の人物と業績については、寺内の略伝にはほぼ尽きてしまうのであるが、茨城大学教育学部の金子一夫氏が工部美術学校の彫刻教育についてまとめられた論文の中に、内藤のベルリン滞在中にやはり留学中の旧津和野藩亀井家当主で、その当時子爵であった亀井茲明と交流があり、その関係で内藤は茲明の養父であり、最後の津和野藩主であった亀井茲監の半身像を明治21年に制作していることが明らかにされている。

また、寺内の記述では、内藤がドイツのベルリンへ渡った経緯についてはまったく述べられていない。しかし、これについては意外なところで明かになってきた。内藤や寺内が工部美術学校を卒業してのち新皇居の造営事業に携わり、その計画の頓挫によって常滑にたどり着いたのであるが、その皇居の設計者は、日本の近代建築学の基礎を築いたイギリス人コンドルであった。そして、内藤が常滑を去った明治18年ころの東京では、内務省が東京市区改正局の新設を太政官に求め、外務省は官庁集中計画のための部局として臨時建築局の創設を上申ししていた時期であった。

明治14年に着工し16年（一八八三）に落成した鹿鳴館は、外務卿井上馨の企画であり、その設計に当たったのがコンドルであった。そして、明治18年、井上は欧米列強との不平等条約改正のため、内務省の商業都市化計画に対して、鹿鳴館の都市化ともいべき官庁集中計画をコンドルに求めた時期であった。ところが、この井上の方針とコンドルの構想には隔たりがあり、井上はコンドルを見切り、鉄血宰相ビスマルク内閣の技術顧問グループに接近し、ドイツのネオバロック様式の旗手、ヘルマン・エンデと契約するに至った。ただし、エンデは当時57歳であり、正式な契約者は、建築事務所を共同経営していたウィルヘルム・ベックマン Wilhelm B. Beckmann であった。このベックマンこそ、寺内の記述にある「ペクマン氏」である。『常滑陶器誌』では、これを「ペリマン」と誤読しているが、寺内の文字を見ると責められない間違いである。

このベックマンが助手のメンツを伴って来日したのが明治19年の1月であった。ベックマンは来日後二ヶ月で東京全体をバロック都市に改造する案をまとめ、その実現のために東京の地形や地質を調べ、調達できる資材の質や日本人技術者のレベルを調べてまわったのである。そして、その不足を補うために日本人技術者のドイツへの留学とドイツ人技術者のチームを招聘することになるのである。

筆者がこの情報を得たのは、藤森照信著『明治の東京計画』という本の文庫版を偶然手にしたことによるのだが、

そのベックマンの提案によってドイツに渡った人名に内藤隆三の名を見出したときには驚かされた。早速、先生のもとへ隆三が陽三の誤認ではないかとの旨照会の手紙を出し、確かに陽三であるとのご返答を頂戴したときには、確実とは信じていながらも狂喜したのであった。

この経緯を踏まえて、その個所を示すと「日本からも、エンデ、ベックマンを身元引受けに頼み、多くの技術者がドイツへ向う。政府給費により臨時建築局の妻木頼黄と渡辺讓が、ベックマン奨学金により河合浩蔵が、それぞれベルリン工科大学をめざしたのをはじめ、建築彫刻の内藤陽三も選ばれ、さらにことは職人にもおよび、大工、左官、石工、屋根職、煉瓦工、ペンキ職、鋳職かぎりなど十三名、そして浅野セメント派遣のセメント伝習生三名も加えると、留学生は都合20名におよんだ。」(二七〇頁)というのである。(隆を陽に訂正)

寺内の伝記では明治19年の11月10日に内藤一行は横浜を出たとなっている。そして、その一行の中に内藤を推薦したと書かれている河合浩蔵が含まれていることからみても、寺内の記述内容は信憑性が高いと言えよう。さらに、先に金子氏の紹介する内藤作品で触れた旧津和野藩亀井家の当主亀井茲明も明治19年11月に出発したとされている。宮内省に勤務していた亀井は、帝室儀式調査の名目で留学したのであるが、その実、美術理論研究のための留学であったとされる。

内藤を指導したとされるオット、レッシングなる人物は、おそらくオットー・レッシングであろうが、その人物像は相変わらず不明である。しかし、初めに内藤が与えられた課題である「アカントの葉」は、南ヨーロッパ原産のキツネノマゴ科ハアザミ属の大形多年草でアカンサスと呼ばれる植物のことである。この葉の図案化された文様は、コリント式の柱頭やローマ建築の壁面装飾に多用されるという。内藤が教えを受けたラグーザは、工部美術学校の生徒にギリシャの古彫刻の立派な事を談じ、学校の備品としてギリシャ、ローマの彫刻の石膏模型が買入れられていたという。さらに金子氏が明治15年の年記を墨書した石膏作品として紹介されている八杉啓次郎作の「柱

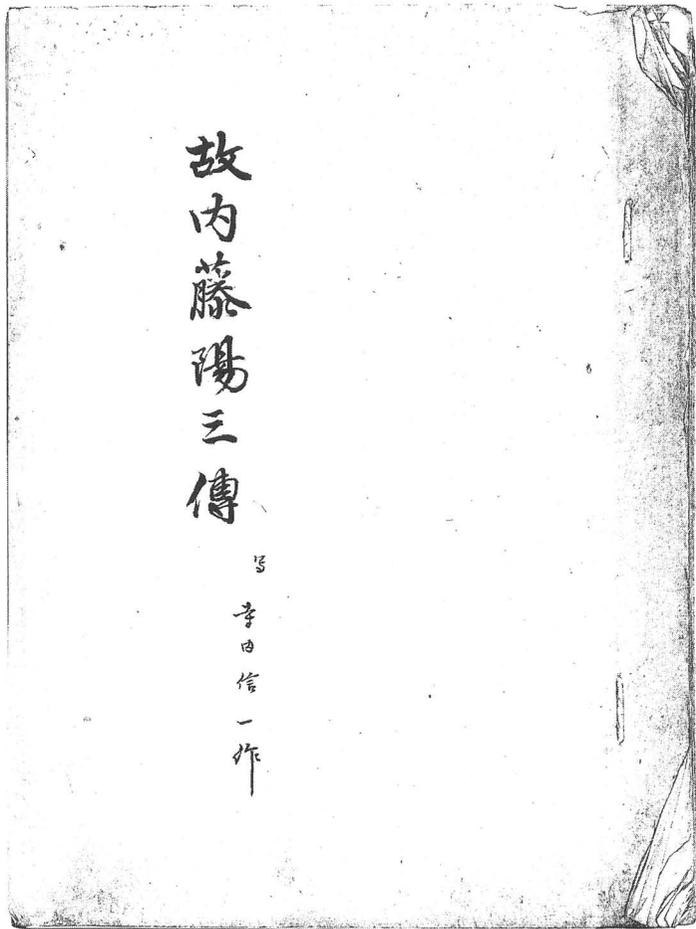
頭」の一部にはアカンサスの表現とおもわれる装飾も認められる。

内藤は師のアシスタントとして給料を受けて皇太子の宮殿造営工事に携わり、内藤と同行した人々が帰国した後もドイツに留まったのであった。これについては、藤森氏の著書がまた参考になる。つまり、明治20年7月になって、井上馨を全権代表として行われてきた不平等条約改正交渉は破談決裂の事態に至った。その責任を取り井上馨は外務大臣を辞任し、臨時建築局総裁の職からも離れざるを得なくなった。そして東京の都市計画事業は外務省から、対立関係にあった内務省に移され、明治21年1月には、ドイツ留学の制を打ち切り、建築家と職人は学業半ばにして本国に召喚されたのであった。したがって、内藤がドイツに残留を希望しても、国としては方針が大きく転換される可能性も大きく、それを聞き入れる余裕があったということであろう。

#### 参考文献

- 「工部美術学校における彫刻教育の研究（1）」金子一夫・伊沢のぞみ『茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学、芸術）』第42号一九九三年 茨城大学
- 「工部美術学校における彫刻教育の研究（2）」金子一夫・伊沢のぞみ『茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学、芸術）』第44号一九九五年 茨城大学
- 『知多郡史』下巻 愛知県知多郡役所 一九三三年
- 『明治の東京計画』同時代ライブラリー18、藤森照信一九九〇年 岩波書店

※史料の活字化作業は、中野晴久が行ったが、一部難読箇所は、民俗資料館友の会  
古文書部会の北川副夫氏のご助言を頂いた。



故内藤陽三傳

写  
寺内信一作

故内藤陽三傳

写  
寺内信一作

亡友内藤鶴嶺略伝

寺内信一述

鶴嶺姓ハ内藤諱ハ陽三といふ幕府旗下の臣也幕府の政やみてより静岡縣士族となりぬ本姓ハ白野氏其父を夏雲とぞ申したる鉾物の學を修め名ある人なり鶴嶺ハ其第三子也幼きとき内藤といへる家に養はる鶴嶺幼少の時に静岡なる鶴嶺となん云へる所によりしかはやかて号を鶴嶺となへけると自ら物語りき家には養母の君只独りにておはしけるか家の禄なども大方鶴嶺修業の料に用ひはたしてゐるとか東京にてもいとところせまかりし住ひしてけり

明治十五年の夏工部美術學校を卒業して第一等の課第に登り三人目にはなりぬ生れ付美術の芸にはさかしくしてあなからに

亡友内藤鶴嶺略伝

寺内信一述

鶴嶺姓ハ内藤諱ハ陽三といふ幕府旗下の臣にや幕府の政やみてより静岡県士族とハなりぬ本姓ハ白野氏其父を夏雲とぞ申したる鉾物の學を修め名ある人なり鶴嶺ハ其第三子也幼きとき内藤といへる家に養はる鶴嶺幼少の時に静岡なる鶴嶺となん云へる所によりしかはやかて号を鶴嶺となへけると自ら物語りき家には養母の君只独りにておはしけるか家の禄なども大方鶴嶺修業の料に用ひはたしてゐるとか東京にてもいとところせまかりし住ひしてけり

明治十五年の夏工部美術學校を卒業して第一等の課第に登り三人目にはなりぬ生れ付美術の芸にはさかしくしてあなからに

手本にもよらずめでたき手なりしかば師もいとたのもしく思ひ  
 て教へられたるさて美術学校ハ此年限り廢校となりけれハ鶴嶺ハ  
 居御造營事務局に備はれ其物具等取片附をなしたるか程なく皇  
 榮次郎（後辭職して金沢へ行く）等ありて山里に建立あるへき正殿  
 雛形（五十分の一）の製  
 造に着手せり鶴嶺と共に種々評議を廻らし洋土（油土）にて之を作る  
 後に菊地鑄太郎佐野昭なども備となり明治十六年の夏此雛形  
 落成に及ぶしかるに上々にてもこれの評議あらせられしや兎角  
 今の我國の技芸にて西洋式の建築の皇城を造りて歐洲大國の美  
 術と肩を比べん事思ひもよらすかかる建築ハ佛國の町なる割烹  
 店にもしかじなどそしる人もあり三條大臣にも此雛形御覽して  
 聖上へハ別に印刷局の頼みて写真となして奏上しぬ上の人々にも

手本にもよらずめでたき手なりしかば師もいとたのもしく思ひ  
 て教へられたるさて美術学校ハ此年限り廢校となりけれハ鶴嶺ハ  
 居御造營事務局に備はれ其物具等取片附をなしたるか程なく皇  
 榮次郎（後辭職して金沢へ行く）等ありて山里に建立あるへき正殿  
 雛形（五十分の一）の製  
 造に着手せり鶴嶺と共に種々評議を廻らし洋土（油土）にて之を作る  
 後に菊地鑄太郎佐野昭なども備となり明治十六年の夏此雛形  
 落成に及ぶしかるに上々にてもこれの評議あらせられしや兎角  
 今の我國の技芸にて西洋式の建築の皇城を造りて歐洲大國の美  
 術と肩を比べん事思ひもよらすかかる建築ハ佛國の町なる割烹  
 店にもしかじなどそしる人もあり三條大臣にも此雛形御覽して  
 聖上へハ別に印刷局の頼みて写真となして奏上しぬ上の人々にも

評議まぢちにて日本には日本故有のわざ社ふさはしけれざるを  
今国風を棄てて叩りに彼を擬し吾拙劣を彼に示し遂には皇  
室の御稜威にハ障りなんまして我國の番匠の手なれぬ業にて  
萬代不易の建立せん事然るへからすと云ふもの數多く出来て遂に  
西洋式の正殿建立ハ中ころ止みぬされは鶴嶺初め皆々辭  
職の願を免され御造營をも引きぬ鶴嶺は其後只なすへき  
事もなくて過ぎん事の口惜さよなどいひてそこかしこ心ありけなる  
やからをとふらひて給得んすへもかなと都をハまとひありき  
けり信一とは一なき友達なれば共に世に遇はざる事のつれ  
なき事を語りあひき此頃工部権大技長宇都宮二郎殿尾  
張國知多郡常滑にまかられて村人呼ひ集へて此村に陶器の學校  
たてて若きものをも教へたらんは一村の業も今一入進みなん

評議まぢちにて日本には日本故有のわざ社ふさはしけれざるを  
今国風を棄てて叩りに彼を擬し吾拙劣を彼に示し遂には皇  
室の御稜威にハ障りなんまして我國の番匠の手なれぬ業にて  
萬代不易の建立せん事然るへからすと云ふもの數多く出来て遂に  
西洋式の正殿建立ハ中ころ止みぬされは鶴嶺初め皆々辭  
職の願を免され御造營をも引きぬ鶴嶺は其後只なすへき  
事もなくて過ぎん事の口惜さよなどいひてそこかしこ心ありけなる  
やからをとふらひて給得んすへもかなと都をハまとひありき  
けり信一とは一なき友達なれば共に世に遇はざる事のつれ  
なき事を語りあひき此頃工部権大技長宇都宮二郎殿尾  
張國知多郡常滑にまかられて村人呼ひ集へて此村に陶器の學校  
たてて若きものをも教へたらんは一村の業も今一入進みなん

とたたられれば八村人もこはいとよきてたてなりとてやかて宇  
都宮より鶴嶺をまねきて之か師に招きたる明治十六年の夏  
なりけり鶴嶺ハ東京を立て尾張名古屋にまかりて宇都宮技長  
にも対面して疾く常滑にいたり美術研究所といふを設け生  
徒十人斗りも教へてありけり

此美術研究所ハ全く専門美術家を教ふるなりたちにて工  
部美術学校の形を其ま取り来り悉く歐洲のものなり常  
滑にハ左まで要用とも覚えすされとも美術家の教育学に暗  
きと工部美術学校にて学ひたる徒の見識には世の中の実  
業徒弟学校等の組織學課授業法などの見聞なきを以てなり  
此れ此時の実業教育の程度として見るも可ならんそ八人にも之  
かたたられれば八村人もこはいとよきてたてなりとてやかて宇  
都宮より鶴嶺をまねきて之か師に招きたる明治十六年の夏  
なりけり鶴嶺ハ東京を立て尾張名古屋にまかりて宇都宮技長  
にも対面して疾く常滑にいたり美術研究所といふを設け生  
徒十人斗りも教へてありけり

「実物写生を前画鉛筆画にて其他幾何画法等も教へ人物肖像も作れり此研究所後に漸々改良して全く徒弟学校の如きものとなりたり」

明治十六年夏頃より同十八年夏頃まで常滑美術研究所教を勤め月給貳拾五円にてありしか鶴嶺は経済之事に迂遠にして兼て東京に於て困窮せしときに所持の書籍も大方質物となしたれば毎月金拾円を東京なる老母及妻子の許に送り余金は常滑に於て用ひぬ酒ハ数多ハのまねとも折に触れて物す平生食を慎まさりしハ鶴嶺が体力を損せし原因ならん食餌ハ兎角躁急にして能く咀嚼せず自から謂う食を早く喰ふも又武士の一藝なりと甘味なる菓子など人よりもらひたるにも直に箱の蓋を披き見るか中にくひ盡くして貯へて後日の料となす事さらになし

居室は塵埃うつ高く存も自ら掃ふ事何事多しと云  
之と見兼て鶴嶺不在のとき私かに掃除をなすか  
なるに言語ハ殊更に少なく初めて遇ひたる人などにはたえて已  
の意見なども語らず余曾て鶴嶺の紹介によりて常滑の陶器  
製造家鯉江高司に傭はれて明治十六年秋に彼地へまかりぬ  
余と内藤と互に無二の親友なれハ窮病相救護し何事も  
つづます言ひあかす習なり鶴嶺か体力至りて弱ければ余之に  
撃剣を勧む即ち夜に入りて俱に剣を学ふまた力を角しなすとす以  
為く美術者一旦天下に事もあらハ技術施す所なしまして戦  
乱ハ美術の敵なれば美術者となりて乱を鎮むる事を  
務めざるへからすと是に於て貳人にて金拾五円斗り出し  
合ひて馬一頭を買ひ閑暇ある毎にのりて馳せまわりけはしき

居室は塵埃うつ高くなるも自ら掃ふ事なし弟子のともから  
之を見兼て鶴嶺不在のとき私かに掃除をなすか  
なるに言語ハ殊更に少なく初めて遇ひたる人などにはたえて已  
の意見なども語らず余曾て鶴嶺の紹介によりて常滑の陶器  
製造家鯉江高司に傭はれて明治十六年秋に彼地へまかりぬ  
余と内藤と互に無二の親友なれハ窮病相救護し何事も  
つづます言ひあかす習なり鶴嶺か体力至りて弱ければ余之に  
撃剣を勧む即ち夜に入りて俱に剣を学ふまた力を角しなすとす以  
為く美術者一旦天下に事もあらハ技術施す所なしまして戦  
乱ハ美術の敵なれば美術者となりて乱を鎮むる事を  
務めざるへからすと是に於て貳人にて金拾五円斗り出し  
合ひて馬一頭を買ひ閑暇ある毎にのりて馳せまわりけはしき

山杯も乗る海へて爛ふかくて常滑研究所ハ屢々中止  
 の姿となりて此度ハ愛知県の補助金もなくなりければ常  
 滑村の人清水守衛となんいへる人一人にて資金を投し弥々  
 新に製造工場を立てぬさて鶴嶺ハ東京江帰りて其後任にハ  
 菊地鑄太郎といふ人來れるも此人ハ鶴嶺の如く少しも日本画  
 等に志あるにもあらず純粹の西洋風のみなれば業拙しとて人々  
 かまひすしくいひければ二月斗りありて東京へ上り其後更に帰  
 らず其後ハ寺内信一かはりて研究所教師とハなりぬ此頃  
 此方にて製造なしたる物品を販売せんとて東京に支店を物  
 しければ鶴嶺ハ始終此事に奔走尽力してありしも今ハ清  
 水守衛より定額の給料とては得されは吾家の話斗も滑な  
 らず兼て常滑にて求めて帰りし轆轤をも吾宅に居えて

山杯も乗る海へて爛ふかくて常滑研究所ハ屢々中止  
 の姿となりて此度ハ愛知県の補助金もなくなりければ常  
 滑村の人清水守衛となんいへる人一人にて資金を投し弥々  
 新に製造工場を立てぬさて鶴嶺ハ東京江帰りて其後任にハ  
 菊地鑄太郎といふ人來れるも此人ハ鶴嶺の如く少しも日本画  
 等に志あるにもあらず純粹の西洋風のみなれば業拙しとて人々  
 かまひすしくいひければ二月斗りありて東京へ上り其後更に帰  
 らず其後ハ寺内信一かはりて研究所教師とハなりぬ此頃  
 此方にて製造なしたる物品を販売せんとて東京に支店を物  
 しければ鶴嶺ハ始終此事に奔走尽力してありしも今ハ清  
 水守衛より定額の給料とては得されは吾家の話斗も滑な  
 らず兼て常滑にて求めて帰りし轆轤をも吾宅に居えて

何れと作れとも金に於ては、何れも所は、以て原赤坂に依りて是  
 校とて聖壁師の徒弟の夜学校立ちぬ鶴嶺之か師となれとも  
 固より薄き給なれば家斗の助ともなり兼ねるをもて又々東  
 京にて知己のやからやからをといありきてよき機会もあらは仕  
 官せんと志さす河合浩蔵となんいへる人ハ工部大学校  
 の卒業生にて建築家なれば兼ねて皇居御造営にて入魂  
 になり此度鶴嶺の身途に付きても種々に思ひを廻らしける折しも  
 内務省建築局にて生徒等の建築家数人を独逸に派遣  
 せんとすこれハ追々国会議事堂などの大建築ある下心なり  
 となん河合氏ハ鶴嶺の爲めに上へ上申しけれハ鶴嶺遂に  
 獨逸留學生の撰に當りたり  
 擬鶴嶺ハ明治十九年十一月十日の事なりけり獨逸人建築

何れと作れとも金になるへくもなし此頃赤坂に佐官学  
 校とて聖壁師の徒弟の夜学校立ちぬ鶴嶺之か師となれとも  
 固より薄き給なれば家斗の助ともなり兼ねるをもて又々東  
 京にて知己のやからやからをといありきてよき機会もあらは仕  
 官せんと志さす河合浩蔵となんいへる人ハ工部大学校  
 の卒業生にて建築家なれば兼ねて皇居御造営にて入魂  
 になり此度鶴嶺の身途に付きても種々に思ひを廻らしける折しも  
 内務省建築局にて生徒等の建築家数人を独逸に派遣  
 せんとすこれハ追々国会議事堂などの大建築ある下心なり  
 となん河合氏ハ鶴嶺の爲めに上へ上申しけれハ鶴嶺遂に  
 獨逸留學生の撰に當りたり  
 擬鶴嶺ハ明治十九年十一月十日の事なりけり獨逸人建築

士ペクマン氏に従ひ横濱を解纜す鶴嶺此度洋行するに  
就てハ妻石井氏懐妊にて心持常ならず老母の君もひたすら  
鶴嶺と遠く隔たりなん事おほつかなくおほしけるにやし  
ひてととめ玉ふも老の身の先少なきより何となく心もとなく  
やおほしけん鶴嶺も殆ど困却しけり或人彼の宅にまかり  
ければ老母ハ切に洋行の程ハ思ひととまる様に諫めてたひとたの  
まれければ其人老母ハ切に洋行の程ハ思ひととまる様に諫めてたひとたの  
まればは其人老母ハ切に洋行の程ハ思ひととまる様に諫めてたひとたの  
御此度の渡航ハいとめてたき事とこそ覚え侍れ今更思  
ひ止むる様諫めん事如何にも聞え難き事にて留守の事  
ハ誰にても心をよせすくし参らすべきに此後高位高官に  
も昇り玉はん家族なれば誰か見捨侍らん心易くおはせ  
此度の事皆人も羨むへき事にて陽三殿の仕合とてかけ

士ペクマン氏に従ひ横濱を解纜す鶴嶺此度洋行するに  
就てハ妻石井氏懐妊にて心持常ならず老母の君もひたすら  
鶴嶺と遠く隔たりなん事おほつかなくおほしけるにやし  
ひてととめ玉ふも老の身の先少なきより何となく心もとなく  
やおほしけん鶴嶺も殆ど困却しけり或人彼の宅にまかり  
ければ老母ハ切に洋行の程ハ思ひととまる様に諫めてたひとたの  
まれければ其人老母ハ切に洋行の程ハ思ひととまる様に諫めてたひとたの  
まればは其人老母ハ切に洋行の程ハ思ひととまる様に諫めてたひとたの  
御此度の渡航ハいとめてたき事とこそ覚え侍れ今更思  
ひ止むる様諫めん事如何にも聞え難き事にて留守の事  
ハ誰にても心をよせすくし参らすべきに此後高位高官に  
も昇り玉はん家族なれば誰か見捨侍らん心易くおはせ  
此度の事皆人も羨むへき事にて陽三殿の仕合とてかけ

有るは喜ぶ折から諫め止むる等はいとをこかましようこそ存  
 在れかる事人の親たるものも情をまけてもすすめ申すこそ  
 道理なる若し吾々の子息等にかかるよき仕合の候ハハ  
 今ハ大病にても喜ひて遣すへきにて諫めけるとなん  
 其外の人々も老母はとやかくとゆくさきの事共思ひや  
 りて老年となり世の中のうき事もさへ耳にするはいと  
 かなしきに陽三留守になり家の事共なにくれとお  
 もひ出してハ心細くのみ侍りとなき給ふ嫁の身の常  
 ならぬさへ心にかかりて夜目も合はす此老母程世にはか  
 なきものなしとてかきくどきけるをきき鶴嶺の心ハいか  
 なりけんおもへは鶴嶺の病の程もかかる事よりなりけんかし  
 人々入替り入替りいさめけれとも今ハ母君もさてと思

有るは喜ぶ折から諫め止むる等はいとをこかましようこそ存  
 在れかる事人の親たるものも情をまけてもすすめ申すこそ  
 道理なる若し吾々の子息等にかかるよき仕合の候ハハ  
 今ハ大病にても喜ひて遣すへきにて諫めけるとなん  
 其外の人々も老母はとやかくとゆくさきの事共思ひや  
 りて老年となり世の中のうき事もさへ耳にするはいと  
 かなしきに陽三留守になり家の事共なにくれとお  
 もひ出してハ心細くのみ侍りとなき給ふ嫁の身の常  
 ならぬさへ心にかかりて夜目も合はす此老母程世にはか  
 なきものなしとてかきくどきけるをきき鶴嶺の心ハいか  
 なりけんおもへは鶴嶺の病の程もかかる事よりなりけんかし  
 人々入替り入替りいさめけれとも今ハ母君もさてと思

ひ定め玉ひけり嫁ハ元より学文もある人なれば心の底はいさ  
 知らず口にあらはして夫の洋行をととむるにはあらず  
 夫の修業とあれ一家の艱難は身につけて如何にもせん  
 と覚悟してけりかくて弥々十一月出立に此方にてかれこれ  
 買物の用意となし十一月十五日横浜をそ立にけり  
 内藤ハ国許に心かかり多ければ船のつきつる所よりは  
 安着してける有様を家許へ報らせホンコン、シンガポ  
 ル、コロンホと度々なり其内歐洲全土を通り独逸の都  
 なるヘルリン府にぞ着きたりける初めはベルリン府の日本  
 公使館に罷り在りて独逸語をも研究せり夫より彫  
 刻教師オット、レッツシグといへる人に従ひけり  
 扱内藤ハレッツシグの許にいたりければ先づ是迄の履

ひ定め玉ひけり嫁ハ元より学文もある人なれば心の底はいさ  
 知らず口にあらはして夫の洋行をととむるにはあらず  
 夫の修業とあれ一家の艱難は身につけて如何にもせん  
 と覚悟してけりかくて弥々十一月出立に此方にてかれこれ  
 買物の用意となし十一月十五日横浜をそ立にけり  
 内藤ハ国許に心かかり多ければ船のつきつる所よりは  
 安着してける有様を家許へ報らせホンコン、シンガポ  
 ル、コロンホと度々なり其内歐洲全土を通り独逸の都  
 なるヘルリン府にぞ着きたりける初めはベルリン府の日本  
 公使館に罷り在りて独逸語をも研究せり夫より彫  
 刻教師オット、レッツシグといへる人に従ひけり  
 扱内藤ハレッツシグの許にいたりければ先づ是迄の履

歴等も細かにたつねて兎まれ角まれ席上にてハ叶  
はつ教場にいたり実地手芸の程を試むへしとて  
最初アカントの業を授けければ二日斗りもかり作り  
けり此間は彼の国の生徒ともいひけん此度日本より  
渡れる弟子いかなるものを作らぬか拙なるか  
国の隔たれハ見苦しきものを作るならんといひあ  
へりて吾もわれもとより集ひて内藤か背後に立ふさ  
かり首をのはしてなかむる輩ひきもきらす内藤  
ハ元来此アカントの名人にて是等のオルナメントハ兼て  
日本にても名高き人なれハ彼の国の弟子ともおと  
ろきいたりけん皆あやしく思ひては又種々の事  
をいひて見にこそまかりけり折しもレッスンが来たり

歴等も細かにたつねて兎まれ角まれ席上にてハ叶  
はつ教場にいたり実地手芸の程を試むへしとて  
最初アカントの業を授けければ二日斗りもかり作り  
けり此間は彼の国の生徒ともいひけん此度日本より  
渡れる弟子いかなるものを作らぬか拙なるか  
国の隔たれハ見苦しきものを作るならんといひあ  
へりて吾もわれもとより集ひて内藤か背後に立ふさ  
かり首をのはしてなかむる輩ひきもきらす内藤  
ハ元来此アカントの名人にて是等のオルナメントハ兼て  
日本にても名高き人なれハ彼の国の弟子ともおと  
ろきいたりけん皆あやしく思ひては又種々の事  
をいひて見にこそまかりけり折しもレッスンが来たり

ややばらく見ますして少しは手本は汝には易きに  
 過るとて今度は人物の手本を與へける内藤ハ又  
 之をも心をこめて作りけるに又前の如くに彼国の弟子  
 とも数多よりつとひて彼れ是れと評議すめれと  
 兎角いみじき巧かなと心のうちにおとろきける様  
 なりかくて数月の間も作り居たりしにレッシングは  
 いたう賞して倍々勉強して彫刻に心を込むへし  
 後來必ず大家となるへしとほめたりとぞ  
 扱内藤ハ我校友の中にてても學に志あり日本国といふ事  
 もたしかに肝に銘したる人なれば何かにつけ我日本  
 の事をいとふとくいひそやす志そありかたき或日  
 教師は内藤に向ひ汝か国人ハ汝か技をいかにいふそと

ややばらく見ますして少しは手本は汝には易きに  
 過るとて今度は人物の手本を與へける内藤ハ又  
 之をも心をこめて作りけるに又前の如くに彼国の弟子  
 とも数多よりつとひて彼れ是れと評議すめれと  
 兎角いみじき巧かなと心のうちにおとろきける様  
 なりかくて数月の間も作り居たりしにレッシングは  
 いたう賞して倍々勉強して彫刻に心を込むへし  
 後來必ず大家となるへしとほめたりとぞ  
 扱内藤ハ我校友の中にてても學に志あり日本国といふ事  
 もたしかに肝に銘したる人なれば何かにつけ我日本  
 の事をいとふとくいひそやす志そありかたき或日  
 教師は内藤に向ひ汝か国人ハ汝か技をいかにいふそと

とはこれにまゝ小秋玉をば吾如きものハ糊口の道  
 も立たず数多志す人の中までもやつかれか如きは  
 物の数にもあらず幸ひ此度は渡航の運に廻り合  
 ひ此大都に來り出精の手邊にかかりし事極めての  
 幸ひなりといへは日本に汝の同朋に巧手なるものあ  
 りやといへハ数多ありといふにそ教師ハ兼てより日  
 本人ハ美術思想に富めりとハ聞きつるものからた  
 のもしき事哉今ハ汝の心當りの同朋五人斗り  
 汝より此方へ呼寄せてはたもるまじきや尤も路資  
 は此方より支出すへしいさしく此由日本に通せ  
 よとあれは内藤ハ日本に向け書翰差立藤田  
 文藏寺内信一田中乙五郎青山武一郎松山

といければさん候我国にては吾如きものハ糊口の道  
 も立たず数多志す人の中にもやつかれか如きは  
 物の数にもあらず幸ひ此度は渡航の運に廻り合  
 ひ此大都に來り出精の手邊にかかりし事極めての  
 幸ひなりといへは日本に汝の同朋に巧手なるものあ  
 りやといへハ数多ありといふにそ教師ハ兼てより日  
 本人ハ美術思想に富めりとハ聞きつるものからた  
 のもしき事哉今ハ汝の心當りの同朋五人斗り  
 汝より此方へ呼寄せてはたもるまじきや尤も路資  
 は此方より支出すへしいさしく此由日本に通せ  
 よとあれは内藤ハ日本に向け書翰差立藤田  
 文藏寺内信一田中乙五郎青山武一郎松山

政太郎なんとなを名さして各篤と思案の上返答  
 ありたしといそへておこしけり  
 扱此方には東京なる藤田文蔵子ハ右之由を信一  
 も伝聞しけり青山武一郎子ハ奈良江詣でての序手なり  
 とて常滑なる信一が許にとひ来てかくかくの由申され  
 けるに熟々思ふに内藤ハ此方にも随分の妙手なりける  
 ものながら彼の国へ渡りてのちも日本の壯年者の美術  
 思想に富たる事には恐れけんされハ此度余人呼寄  
 もするらんと思へハ今此名指の面々にて浅慮にも彼  
 国に渡らハ元より少々の財産もなく妻子をのこして  
 此方の事もほたしとはなるへし今すこし熟慮あるへし  
 腕手の程も内藤に引統きて名譽を隨さす物

政太郎なんとなを名さして各篤と思案の上返答  
 ありたしといそへておこしけり  
 扱此方には東京なる藤田文蔵子ハ右之由を信一  
 も伝聞しけり青山武一郎子ハ奈良江詣でての序手なり  
 とて常滑なる信一が許にとひ来てかくかくの由申され  
 けるに熟々思ふに内藤ハ此方にも随分の妙手なりける  
 ものながら彼の国へ渡りてのちも日本の壯年者の美術  
 思想に富たる事には恐れけんされハ此度余人呼寄  
 もするらんと思へハ今此名指の面々にて浅慮にも彼  
 国に渡らハ元より少々の財産もなく妻子をのこして  
 此方の事もほたしとはなるへし今すこし熟慮あるへし  
 腕手の程も内藤に引統きて名譽を隨さす物

此の程の心算ハ最初よりあるといひ一応  
 御尤なりといひて別れけり尤も信一ハ父の大病に  
 あひたる折節なれば渡航の志は元も起きず  
 彼国にては其頃美術の展覧会あるによりてレッシン  
 グ氏の門弟数多あるか中にも各々出品せん心組なり  
 とて内藤ハ一人の門弟と申合せ相互に其肖像を  
 作り合ひて出さんとてかたみに手本となりて写  
 生しける折から彼国にては審査官ハ予め製造  
 するるときより数度来りて製造の模様をも細かに見届け  
 手帖等に認め置く由吾国の審査官の如く粗略不信  
 なるにあらすといへり其像落成の上出品なし  
 内藤のみ銅の賞牌を得たりとそ斯は内藤一人

の榮譽のものが内藤の榮譽とを中居御前が以て  
 内藤ハ金子を師の手許に納むるに及はすかへりて  
 師より給を得て日々皇太子の宮殿御造営工事に  
 随從せりかくてはいと教師の氣にかなひたる弟子とは  
 なりぬされハ日本より内藤と同行したる同朋ハ帰朝  
 したる後も内藤のみは彼の国にとまり居て教師の  
 業を補けありしも内藤ハ兼て少しく肺の病あ  
 りしにや所詮少しの恙になやみ居たるも口に出さず  
 堪忍してありしかと此度ハ弥々医師にかかりしかは  
 肺結核となんいへる重き病なれハとて養生專一にそ  
 申しけるされと内藤ハ此事日本へ報せなは却りて  
 家内の心配思ひやられるれハ太したる事をいはず

の榮譽のみかは日本の榮譽とを申すへき此程ハ  
 内藤ハ金子を師の手許に納むるに及はすかへりて  
 師より給を得て日々皇太子の宮殿御造営工事に  
 随從せりかくてはいと教師の氣にかなひたる弟子とは  
 なりぬされハ日本より内藤と同行したる同朋ハ帰朝  
 したる後も内藤のみは彼の国にとまり居て教師の  
 業を補けありしも内藤ハ兼て少しく肺の病あ  
 りしにや所詮少しの恙になやみ居たるも口に出さず  
 堪忍してありしかと此度ハ弥々医師にかかりしかは  
 肺結核となんいへる重き病なれハとて養生專一にそ  
 申しけるされと内藤ハ此事日本へ報せなは却りて  
 家内の心配思ひやられるれハ太したる事をいはず

ありけりは方大熊氏廣か伯林へ渡りしときも  
 ともにドレスデンまで行きて其博物館も見て別れ  
 たりとそ此時も日本の事ともいひ出では俱に帰り  
 行きたき由をいひ涙くみてそ物語りしとそ  
 総して肺の病にかかれば感覺常よりも過敏になる  
 ものとかや内藤も彼国にて日本の人に遇へは頻り  
 に別れ難ふ惜みかなししと大熊氏廣氏の物  
 語りなり

鶴 山嶺終焉 明治廿二年五月十三日午後十時シンガポール  
ト香港間航行中二病卒ス享年三十  
 明治廿二年四月の末つかたなりけん独逸伯林府より内藤  
 鶴嶺か日本の吾婦のもとにおこせたる消息には肺の病  
 と果もあつたは醫師も切に地を替へざらんハ

なんありける此方大熊氏廣か伯林へ渡りしときも  
 ともにドレスデンまで行きて其博物館も見て別れ  
 たりとそ此時も日本の事ともいひ出では俱に帰り  
 行きたき由をいひ涙くみてそ物語りしとそ  
 総して肺の病にかかれば感覺常よりも過敏になる  
 ものとかや内藤も彼国にて日本の人に遇へは頻り  
 に別れ難ふ惜みかなししと大熊氏廣氏の物  
 語りなり

さし上る甲斐も見えずは上日本へかへりませとそいふ  
 其師レツシングも斯由すめれば此度ハ弥々伯林  
 を出立して帰国の途に上りたりとせしめられは  
 病気の重き事こそゆゆしけれ兼而鶴嶺渡航の折  
 に心地常ならずおはせし妻君の生みし子は男  
 子にて鋼一郎となん名けし年二歳にはなり玉ふ  
 待ちにまちたる妻君や老母の君もいかばかりか嬉し  
 くそ賞する鶴嶺の兼而教へし弟子の輩も吾師  
 の此度の帰国を何よりも嬉しく思ひ指をりつつも  
 まちもうけたり独逸のレツシング教師よりハ此度鶴  
 嶺帰国に及ぶされハ此人天資美妙の技に富み勵  
 精苦學必らず大家とならん政府は此人を重く用ひ

さし上る甲斐も見えずは上日本へかへりませとそいふ  
 其師レツシングも斯由すめれば此度ハ弥々伯林  
 を出立して帰国の途に上りたりとせしめられは  
 病気の重き事こそゆゆしけれ兼而鶴嶺渡航の折  
 に心地常ならずおはせし妻君の生みし子は男  
 子にて鋼一郎となん名けし年二歳にはなり玉ふ  
 待ちにまちたる妻君や老母の君もいかばかりか嬉し  
 くそ賞する鶴嶺の兼而教へし弟子の輩も吾師  
 の此度の帰国を何よりも嬉しく思ひ指をりつつも  
 まちもうけたり独逸のレツシング教師よりハ此度鶴  
 嶺帰国に及ぶされハ此人天資美妙の技に富み勵  
 精苦學必らず大家とならん政府は此人を重く用ひ

てな怠りそと電報もて内務省へいひおこせたり  
昔初旬なりけり独逸の船横浜につくへしと  
聞こえけれハ藤田文蔵其他ハ親族の人々打連れ  
六七人も横浜のやとりにて待ちまうけたり宿の  
人今朝とく独逸の船こそ入りたれとよめいそき  
立いてて見れば現に一人の独逸婦人の来れるあり  
宿の手代のいへるやう内藤殿の奥方にて候といふにそ  
一同は驚きて内藤にハ此方に妻君もあり剩へ子  
まてありつるものをこは思ひよらざる事とも哉  
さては内藤ハ独逸の女かたらいてかへりしかと人  
々顔打なかめて驚きあへるも皆々独逸の語をも弁  
へざれば兎角事の仔細も分らず只内藤に遇

てな怠りそと電報もて内務省へいひおこせたり  
五月初旬なりけり独逸の船横浜につくへしと  
聞こえけれハ藤田文蔵其他ハ親族の人々打連れ  
六七人も横浜のやとりにて待ちまうけたり宿の  
人今朝とく独逸の船こそ入りたれとよめいそき  
立いてて見れば現に一人の独逸婦人の来れるあり  
宿の手代のいへるやう内藤殿の奥方にて候といふにそ  
一同は驚きて内藤にハ此方に妻君もあり剩へ子  
まてありつるものをこは思ひよらざる事とも哉  
さては内藤ハ独逸の女かたらいてかへりしかと人  
々顔打なかめて驚きあへるも皆々独逸の語をも弁  
へざれば兎角事の仔細も分らず只内藤に遇

ふを此上の喜びと思ひ居りしも言語は通はず  
 折から河合浩蔵君も鶴嶺出迎をしておくれ  
 まかられる皆々ハ右之由伝へけるにそはいふかしと  
 直ちに右の洋人に対面して事の由いとこまかに  
 尋ねられければ（浩蔵君は嘗て独逸に留學せられし故其語に精しく  
 ありし）鶴嶺は  
 長の航路に疲れ印度コロンボよりシンガポール  
 の間の航路にてはかなくなりぬと云ふを聞ききて  
 皆々胸つふれあきれてえも言はず偕て此迄病  
 氣の由も度々聞えけれども斯くまで世を早く  
 去りなん事は思ひもよらすせてハ病厚くとも  
 此国に歸りては死なてよと人々皆なきけるいつ迄  
 斯く言ふとも詮なしされは本船に行て委細

ふを此上の喜びと思ひ居りしも言語は通はず  
 折から河合浩蔵君も鶴嶺出迎をしておくれ  
 まかられる皆々ハ右之由伝へけるにそはいふかしと  
 直ちに右の洋人に対面して事の由いとこまかに  
 尋ねられければ（浩蔵君は嘗て独逸に留學せられし故其語に精しく  
 ありし）鶴嶺は  
 長の航路に疲れ印度コロンボよりシンガポール  
 の間の航路にてはかなくなりぬと云ふを聞ききて  
 皆々胸つふれあきれてえも言はず偕て此迄病  
 氣の由も度々聞えけれども斯くまで世を早く  
 去りなん事は思ひもよらすせてハ病厚くとも  
 此国に歸りては死なてよと人々皆なきけるいつ迄  
 斯く言ふとも詮なしされは本船に行て委細

之由を聞かはやと右の婦人をともない船へ八行き  
 ぬ偕此婦人ハかねて鶴嶺と同行して早く帰朝  
 なしたる友達（日本人）と深く契り合ひ鶴嶺之らか  
 媒して妻あわせたる人にて此度内藤の看病  
 旁々同行して日本に渡りし人なりとなん  
 委しき様も此人こそ知りつれ道すからかたらひ  
 共に涙にくれたるも理なり鶴嶺が鬢の髪  
 と金の時計と妻石井氏の写真ハ鶴嶺最後の  
 時手つから此独逸婦人に授け是を証拠に東京  
 に上り玉はは吾家に報せ玉へといひてそねむり  
 たまひきとて取り出す扱は今はのきわも  
 吾妻のうつつ絵を見て此世の別れを惜み

之由を聞かはやと右の婦人をともない船へ八行き  
 ぬ偕此婦人ハかねて鶴嶺と同行して早く帰朝  
 なしたる友達（日本人）と深く契り合ひ鶴嶺之らか  
 媒して妻あわせたる人にて此度内藤の看病  
 旁々同行して日本に渡りし人なりとなん  
 委しき様も此人こそ知りつれ道すからかたらひ  
 共に涙にくれたるも理なり鶴嶺が鬢の髪  
 と金の時計と妻石井氏の写真ハ鶴嶺最後の  
 時手つから此独逸婦人に授け是を証拠に東京  
 に上り玉はは吾家に報せ玉へといひてそねむり  
 たまひきとて取り出す扱は今はのきわも  
 吾妻のうつつ絵を見て此世の別れを惜み

去不と也親族は猶更迎に出し人々も思はず  
 落涙もむせひつありし猶も船長に遇ひて委細  
 の様子をきき糺しつるに鶴嶺死骸は水葬になし  
 其遺物の荷物は香港の日本領事に托したりと  
 云ふにそ迎の人々はあまりの事に夢の如き心持し  
 て船よりかへり皆々元のやとりに寄り集ひて評議  
 しけるに東京なる妻君石井氏ハ此程より病篤  
 くして昨今ハ如何と思はるるにぞ打つけに此由聞  
 へなは絶へ入玉はんする程ぞ思ひやられていか  
 にかにと煩ひける所詮東京にてもまちにまち玉  
 すらん所へ鶴嶺のはかなくなり玉ひしを告げ  
 なは中々思ひもよらぬ禍も出来んすらん

しかと思ふ親族は猶更迎に出し人々も思はず  
 落涙にむせひつありし猶も船長に遇ひて委細  
 の様子をきき糺しつるに鶴嶺死骸は水葬になし  
 其遺物の荷物は香港の日本領事に托したりと  
 云ふにそ迎の人々はあまりの事に夢の如き心持し  
 て船よりかへり皆々元のやとりに寄り集ひて評議  
 しけるに東京なる妻君石井氏ハ此程より病篤  
 くして昨今ハ如何と思はるるにぞ打つけに此由聞  
 へなは絶へ入玉はんする程ぞ思ひやられていか  
 にかにと煩ひける所詮東京にてもまちにまち玉  
 すらん所へ鶴嶺のはかなくなり玉ひしを告げ  
 なは中々思ひもよらぬ禍も出来んすらん

才て妻君の病の厚きをやとて此上は切に鶴  
 嶺の事は包むべきかから言ふも言えぬ  
 有しひを遂に皆と横濱をそ立にける  
 東京なる老母妻君は折節病厚きも今日は  
 吾夫の帰りますといへは少しくは心持よけに  
 嫡子銅一郎にも衣させなど褥の中より差図し  
 いとらうたく装ひたり人父君かへりますと  
 親子喜び嬉し泣きしてまち玉ふものから  
 迎の人々車に打ちのり入り来れるに老母ハ喜び門  
 口迄そ出まして妻君は褥の中ながらも今日ハいとそ  
 よき衣打ちかてやおら起き上り玉ひ婢に嫡  
 子抱かせて迎には出し玉ふ老母ハ並ひかへ

まして妻君の病の厚きをやとて此上は切に鶴  
 嶺の事は包み置きかりにそら言にても聞えなん  
 なといひて遂に皆々横濱をそ立にける  
 東京なる老母妻君は折節病厚きも今日は  
 吾夫の帰りますといへは少しくは心持よけに  
 嫡子銅一郎にも衣させなど褥の中より差図し  
 いとらうたく装ひ今日なん父君かへりますと  
 親子喜び嬉し泣きしてまち玉ふものから  
 迎の人々車に打ちのり入り来れるに老母ハ喜び門  
 口迄そ出まして妻君は褥の中ながらも今日ハいとそ  
 よき衣打ちかてやおら起き上り玉ひ婢に嫡  
 子抱かせて迎には出し玉ふ老母ハ並ひかへり

たる俵の中と尋ねた兄をたゞも鶴嶺のなきをあやし  
 と思ひ玉ひ借老はれを国のかたをいふか俵し陽三  
 の面さしのかわりたるにやと思ひ玉ひてか俵よりお  
 つる人の顔見やりければ皆々も挨拶なしたるに老  
 母は陽三は何れに候そと尋ねけるに皆々答へによと  
 みてありしも藤田文蔵氏つと出ててされはにて  
 候陽三君の御事に付きてハ深き仔細の侍りて  
 少し帰国の程もおくれ候といへは老母はこは  
 思ひもよらぬ事にて候いかなる仔細か侍りけん  
 兎も角もこれへとて妻君の居間迄招しければ  
 皆々入りたり

此人々ハ藤田河合田辺其他妻君の弟にておはす人等なり

皆打ふして此度鶴嶺君帰国の途途中  
 を病篤くなりまさりて泣く香港の港の上陸  
 行は處を暫く養生ありて全快の上陸  
 ありぬしと述られらるに隠すより露れ易  
 き諺の濁らす述る語の端行となく涙ぐみ  
 たる一座の人々も打しをれたる顔色は如何  
 にも深き仔細のあるべき様にそ見ゆ又妻君  
 も此事聞き玉ひて如何に重き病にてか煩ひ玉ふ  
 らむと枕を杖に起き上り玉ひて鋼一郎を抱  
 きてなげき玉ふを見ては人我の隔もなく皆  
 つらねたる袖も露けく哀れなる夢をも見  
 るもの哉と思ひつる妻君老母も人々の歎きの

皆打ふして此度鶴嶺君帰国の途途中

にて病篤くなりまさりて泣く香港の港の上陸

あり此処にて暫く養生ありて全快の上陸

あるへしと述られけるに隠すより露れ易

き諺の濁らす述る語の端何となく涙ぐみ

たる一座の人々も打しをれたる顔色は如何

にも深き仔細のあるべき様にそ見ゆ又妻君

も此事聞き玉ひて如何に重き病にてか煩ひ玉ふ

らむと枕を杖に起き上り玉ひて鋼一郎を抱

きてなげき玉ふを見ては人我の隔もなく皆

つらねたる袖も露けく哀れなる夢をも見

るもの哉と思ひつる妻君老母も人々の歎きの

顔も孝をあらぬをつらくなめ是は付令一すれ深  
 き仔細やあらんと重ねがさねの尋ねもなきぞら事を  
 かきあつめ此場の時宜とも作りたりかかれは鶴嶺  
 の遺物は申すに及はず更にも出さす迎えの人々にて  
 預かり置き此上ハ妻君の病氣おこたるにつけ実  
 事もあかさんと申合ひ皆々別れけり  
 其後いつ迄か包み送らるへきとて藤田など言合  
 せ鶴嶺死亡の程を告たりけるに兼而皆々の顔色  
 にも常の事ならめやとは思へとはかなき事とて  
 泣き玉ふ妻君はせめていかに此子をも見たく思  
 しめしつらんと乳児かい抱きて泣き玉ふ  
 兼て船にて最後に写真に向ひ名残をしみ玉ひし

事とも聞き玉ひやがて氣も狂ひなん程歎  
 きける長の船路に親しき人も枕上には侍らす  
 なとか此世をうらめしうハおほしつらんうせ玉ひ  
 し死骸たに海の底にはふり玉ひてと鬢の髪金  
 の時計なと手にとり打なけき老母の君はかかる  
 事も侍らはこそ陽三渡航の最初に呉々も  
 留め侍りしを人々ハ益なき事を勧め玉ひしそ  
 如何に異国までまかり功名手柄したりとも命も  
 なくて吾国の土にだになり侍らぬそ言甲斐なき  
 とくとき立て歎き玉ふそあわれなる河合浩  
 蔵藤田文蔵氏ハ鶴嶺のうせにし事を新  
 聞紙に掲げて弥々五月 日葬儀の式を奉

事とも聞き玉ひやがて氣も狂ひなん程歎  
 きける長の船路に親しき人も枕上には侍らす  
 なとか此世をうらめしうハおほしつらんうせ玉ひ  
 し死骸たに海の底にはふり玉ひてと鬢の髪金  
 の時計なと手にとり打なけき老母の君はかかる  
 事も侍らはこそ陽三渡航の最初に呉々も  
 留め侍りしを人々ハ益なき事を勧め玉ひしそ  
 如何に異国までまかり功名手柄したりとも命も  
 なくて吾国の土にだになり侍らぬそ言甲斐なき  
 とくとき立て歎き玉ふそあわれなる河合浩  
 蔵藤田文蔵氏ハ鶴嶺のうせにし事を新  
 聞紙に掲げて弥々五月 日葬儀の式を奉

く来り集るもの数百人棺に鬢髪をそ入れたり  
 ける寺は駒込吉祥寺にて式場にて藤田文蔵  
 氏は内藤陽三の伝記及生前の行状等をも泣  
 々述へければ式につらなる人々にも鶴嶺を借  
 しみて藤田子の友義に感じ泣かぬものそなか  
 りしとぞ

鶴嶺身まかりし後にて其

写絵を見て詠める

信一

「ほほみてし其おもかけハ中々に  
 なげきの種となるそかなしき

く来り集るもの数百人棺に鬢髪をそ入れたり

ける寺は駒込吉祥寺にて式場にて藤田文蔵

氏は内藤陽三の伝記及生前の行状等をも泣

々述へければ式につらなる人々にも鶴嶺を借

しみて藤田子の友義に感じ泣かぬものそなか

りしとぞ

鶴嶺身まかりし後にて其

写絵を見て詠める

信一

「ほほみてし其おもかけハ中々に

なげきの種となるそかなしき

# 鶴嶺迹後

天資美藝に富み学識度量人に過ぎざる者  
 ふして果断の才あるも天之に假すに寿を以て  
 世に天道は是非歎仰て天を恨まんのみ誰  
 か国家の為斯芸の為此人を惜しまざらむや長征  
 の辛苦霜雪の艱勉を重ね未だ故国の恩を  
 報せず鯨波怒涛の間を翔り印度洋中  
 炭烟と爰に三十年を一夢として此世に蔭を留め  
 さる事誰か此世の情の難きを感せざらむや嘗て  
 鶴嶺の為に配慮したる河合浩藏氏か如き多年  
 の拮据も水泡に帰したる事こそ口惜しけれ  
 扱未亡人石井氏子ハ追々病氣も全快したれとも

## 鶴嶺迹後

天資美芸に富み学識度量人に過ぎざる者  
 ふして果断の才あるも天之に假すに寿を以て  
 世に天道は是非歎仰て天を恨まんのみ誰  
 か国家の為斯芸の為此人を惜しまざらむや長征  
 の辛苦霜雪の艱勉を重ね未だ故国の恩を  
 報せず鯨波怒涛の間を翔り印度洋中の  
 炭烟と爰に三十年を一夢として此世に蔭を留め  
 さる事誰か此世の情の難きを感せざらむや嘗て  
 鶴嶺の為に配慮したる河合浩藏氏か如き多年  
 の拮据も水泡に帰したる事こそ口惜しけれ  
 扱未亡人石井氏子ハ追々病氣も全快したれとも

いと痛ふ吾夫の事を思ひ煩ひ玉ひしより少し  
 神経の病にかかりたり此ハ親元へ帰縁すへき  
 にさまり老母の君ハ静岡の親戚に依らしめ鋼  
 一郎は鶴嶺の志を継がしめんも幼なれば成長  
 まては祖父夏雲氏に養育をそまかせけり  
 されは鋼一郎養育の料とて有志者より若  
 干の金募りて之に付け箱館なる夏雲  
 氏の家に遣しける如何に宿世の因とはいへ  
 かかる憂き事に遇ふ子やあると人々皆涙に  
 むせひつるとそ藤田文蔵君の物語のまま  
 かいしるしぬ

遺子鋼一郎氏

明治四十二年大阪醫學學校  
 在留す

いと痛ふ吾夫の事を思ひ煩ひ玉ひしより少し  
 神経の病にかかりたり此ハ親元へ帰縁すへき  
 にさまり老母の君ハ静岡の親戚に依らしめ鋼  
 一郎は鶴嶺の志を継がしめんも幼なれば成長  
 まては祖父夏雲氏に養育をそまかせけり  
 されは鋼一郎養育の料とて有志者より若  
 干の金募りて之に付け箱館なる夏雲  
 氏の家に遣しける如何に宿世の因とはいへ  
 かかる憂き事に遇ふ子やあると人々皆涙に  
 むせひつるとそ藤田文蔵君の物語のまま  
 かいしるしぬ

(遺子鋼一郎氏 明治四十二年大阪醫學學校に在留す)

鶴嶺曾而尾張知多郡常滑にありし頃兼而  
 食を慎まざりしにや腸か答兒に罹り長く患ひ  
 よふよふをこたらんとする頃又もや間歇熱に  
 罹り之か為めいたく瘦衰へたるか其後  
 東都に上りてよりは冗然として定まりたる  
 業にもつかすそこはかとまとひありき漸々洋  
 行の好機に会するや元來冷烟なる吾家の  
 事を思ふ情深き等鶴嶺の命を縮  
 めたる因なるへし彼の国にゆきても独逸の寒  
 地といひ空気のよからぬといひ鶴嶺が病を  
 誘発せしめしはしならんか曾て東都にある  
 ととき河合氏とともに浅草温泉に浴し

鶴嶺曾而尾張知多郡常滑にありし頃兼而  
 食を慎まざりしにや腸か答兒に罹り長く患ひ  
 よふよふをこたらんとする頃又もや間歇熱に  
 罹り之か為めいたく瘦衰へたるか其後  
 東都に上りてよりは冗然として定まりたる  
 業にもつかすそこはかとまとひありき漸々洋  
 行の好機に会するや元來冷烟なる吾家の  
 事を思ふ情深き等鶴嶺の命を縮  
 めたる因なるへし彼の国にゆきても独逸の寒  
 地といひ空気のよからぬといひ鶴嶺が病を  
 誘発せしめしはしならんか曾て東都にある  
 ととき河合氏とともに浅草温泉に浴し

たりとき河合氏ハ鶴嶺の体のいとやせたるを  
 見て戯ニ子の体の瘦せたるを見れば如何にも  
 伯林行ハ覺束なく見ゆるなりといへは鶴  
 嶺笑ひながら斯る瘦男こそ中々無病  
 にて侍りといひし事ありと自らも体は瘦  
 せたりとは思ひつらんも強てかくいひしよ  
 と思へは其洋行せん心の熱心なる程を思ひ  
 やるへし美に此人こそ美術戦場にて討  
 死して太平無事の世に遇はぬ人とはいふ  
 なれ

鶴嶺と余と生前の知己たる事魚水  
 なれ

たるとき河合氏ハ鶴嶺の体のいとやせたるを  
 見て戯に子の体の瘦せたるを見れば如何にも  
 伯林行ハ覺束なく見ゆるなりといへは鶴  
 嶺笑ひながら斯る瘦男こそ中々無病  
 にて侍りといひし事ありと自らも体は瘦  
 せたりとは思ひつらんも強てかくいひしよ  
 と思へは其洋行せん心の熱心なる程を思ひ  
 やるへし美に此人こそ美術戦場にて討  
 死して太平無事の世に遇はぬ人とはいふ  
 なれ

鶴嶺と余と生前の知己たる事魚水

七歳ありて而して余父の喪にあひたるも  
 同時に内藤の失にし事を聞き悼惜に  
 堪ゆる能はず其後東都に往き河合藤田  
 の諸子に遇ひ内藤陽三の事をきき折もあら  
 ば之か記事を作り置かんと思ひて果さず  
 明治二十五年の暑中偶閑暇を得て篋底  
 を探れば鶴嶺の消息山の如く或ハ読み或ハ  
 泣き凄然として情に堪へず乃ち筆をとり  
 一日にして此記をなす

寺内信一

寺内信一

常滑市民俗資料館

研究紀要 X

二〇〇二

常滑市教育委員会